



Until we are all equal



女の子たちの日々の抵抗

「現実の選択、現実の生活」からの知見

要約

世界中の女の子は日々、彼女たちに求められているジェンダー観や役割に抵抗している。

プラン・インターナショナルの「**現実の選択、現実の生活**」調査は、ベナン・ブラジル・カンボジア・ドミニカ共和国・エルサルバドル・フィリピン・トーゴ・ウガンダ・ベトナムの9カ国に暮らす女の子の生活に関する理解を深めるものである。

今回の調査では、104名の女の子の子ども時代を調べ、彼らが様々な形でジェンダー不平等に抵抗し、コミュニティの変化を促していることを検証している。



主な調査結果

- 1 世界中の女の子が現状を変えたいと望んでいる。「**現実の選択、現実の生活**」の調査対象の女の子の多くは、教育・キャリア・自由や移動の公平性、および女性の経済的エンパワーメントに関して、平等な権利と機会があるべきだと思っている。
- 2 女の子は、今まで教えこまれてきたジェンダー役割分業に疑問を抱き、ジェンダー不平等が社会的な規範によって育てられた結果だと考えるようになっている。彼女たちは、男の子と比べて重い家事の責任や自由の制限に対し、不満を表明している。
- 3 女の子は現状を変えたいと強く願っているにもかかわらず、彼女たちの多くは、保護者にそうした意見を述べたり逆らったりするなど、**ジェンダー規範に対して思いどおりに公然と抗うことはできないと感じている。**
- 4 女の子は、**ジェンダー平等の実現は自分たちだけでは達成できないことを認識している。**彼女たちは大人や権威者に対し、特に包括的性教育(CSE)や女の子を暴力から守る取り組みの強化に関して、変化を強く求めている。また彼女たちは、家庭やコミュニティにおいて、大人が女の子を意思決定に関与させる方法に関して提案も行っている。
- 5 女の子は**創造力と勇気**をもってジェンダー規範に抵抗している。彼女たちの63%が保護者に知られないように、収入の獲得(13%)、男の子との交友関係(38%)や恋愛関係(23%)など、**社会規範に抵抗するような行動をとっている。**
- 6 発覚すれば、**女の子は重大な危険にさらされる。**実際、83%が子ども時代に身体的懲罰を経験している。これほど多くの女の子がひそかに抵抗せざるを得ない状況では、進歩は遅々としたものにならざるを得ない。公に語られないままでは、ジェンダー平等は実現しない。
- 7 女の子の約半数は、望ましくないと思われる行動や服装をすること・いじめや暴力から身を守ること・家事を拒否すること・貯金をして経済的に自立することなど、**ジェンダー規範に明確に抵抗できる。**だが、そうした女の子でも、生活の他の面では規範に従わなければならないと感じることは多い。
- 8 私たちは、女の子が望むあらゆるレベルの抵抗を支持し、彼女たちが安全に抵抗できる状況を保障したいと考えている。
- 9 保護者やコミュニティの大人が押し付ける**厳格なジェンダー役割分業と期待**が、女の子の抵抗能力を制限している。大人は彼女たちの声を傾聴し、後押しする必要がある。
- 10 私たちは、女の子が自らを守り、変化を求め続けられるようにするための鍵として、**保護者の役割・安全な環境・リソースへのアクセスの確保**を特定した。これらは、彼女たちが変化を推進し、ジェンダー規範に抵抗し続けるための重要な要素である。

行動の呼びかけ



政府と行政は、ジェンダー規範に挑み平等を促進する法的枠組みを強化し、執行すべきである。また、女の子のリーダーシップと公平な機会を強化するため、教育やコミュニティの取り組みに資金提供すべきである。加えて、ジェンダー平等を啓発するため、市民社会・NGO・地方自治体・コミュニティリーダーに対する支援やリソースの提供、連携を行うべきである。



NGOと市民社会アクターは、保護者やコミュニティの住民と連携し、ジェンダー規範の認知度を高め、改善すべきである。また、女の子がスキルを習得し、仲間とつながり、意思決定やコミュニティ活動に参加できるよう支援すべきである。



地方自治体は、女の子主導の取り組みを支援し、彼女たちのニーズに対し公共サービスの対応が可能であるようにすべきである。また、彼女たちの意見が認識され、尊重された上で、彼女たちが自身の考えを共有し、コミュニティの意思決定の形成に貢献できるような場を確保すべきである。



学校は、女の子にとって安全な空間を確保するとともに、あらゆる年齢やジェンダーの生徒の多様なニーズを反映した方針を策定すべきである。また、生徒全員を支援できるよう職員研修やカリキュラムを充実させ、ジェンダー混合の活動が尊重され、女の子がリーダーシップを発揮できる包摂的な環境を育む必要がある。



目次

要約	2
主な調査結果	3
行動の呼びかけ	4
.....	
はじめに	7
「現実の選択、現実の生活」	8
.....	
女の子の抵抗: 現時点での知見	11
.....	
女の子の日々の政治的行動の理解の仕方	14
「女の子は社会規範に従うべき」:	
女の子の抵抗を生む環境を形成する保護者	20
女の子の日々の生活での抵抗の物語	25
.....	
「女の子も男の子と同様、ボールで遊べる」: Juliana、ブラジル	40
.....	
女の子の日々の抵抗への支援	42
.....	
結論: 女の子は日々変革を促進している	44
.....	
提言	46
政府と当局	46
NGOと市民社会	46
地方自治体とコミュニティリーダー	47
学校と教育者	47
.....	
謝辞	48
.....	
脚注	50

はじめに

世界中で、女の子のリーダーやアクティビストとしての存在感が高まっている。

しかし女の子の多くは、もっと目立たない形でジェンダー不平等と戦っている。本報告書は、自身をアクティビストと認識しているかどうかではなく、「普通の」女の子が日々の生活の中でどのようにジェンダー規範に挑んでいるのかを探った。

9カ国の女の子と彼女たちの保護者を対象とした18年間の調査に基づき、本報告書はジェンダー役割分業に基づいて期待される考えや行動に、女の子が子ども時代を通して抵抗する多様な方法を示している。

女の子のジェンダー規範への挑戦についての話に基づき、日々の生活でのジェンダー不平等が、彼女たちにとって適切な方法で認識・対応されるよう、私たちはより踏み込んだ支援策を提言する。重要なのは、女の子にとって安全で公平なコミュニティを、大人が構築するために注力すべき点を提案している点である。



女の子と女性の権利の背景や女の子と女性の抵抗の歴史など、9カ国それぞれの概要に関しては、**技術報告書Annex1**を参照のこと➡



女の子たちが自身の権利擁護のために立ち上がる自信とスキルを示す、ブラジル
© Plan International / Rafael Gardini

注:

① 全参加者のプライバシー保護のため、彼らの氏名は変更され、具体的な場所の記載は削除されている。

本地図に示されている境界線・名称・表記は、プラン・インターナショナルによる公式な賛同または承認を意味するものではない。

「現実の選択、現実の生活」

「現実の選択、現実の生活」は、プラン・インターナショナルの調査であり、2006年に生まれた9カ国の142名の女の子^aの生活を、18歳になる2024年まで追跡調査したものである。

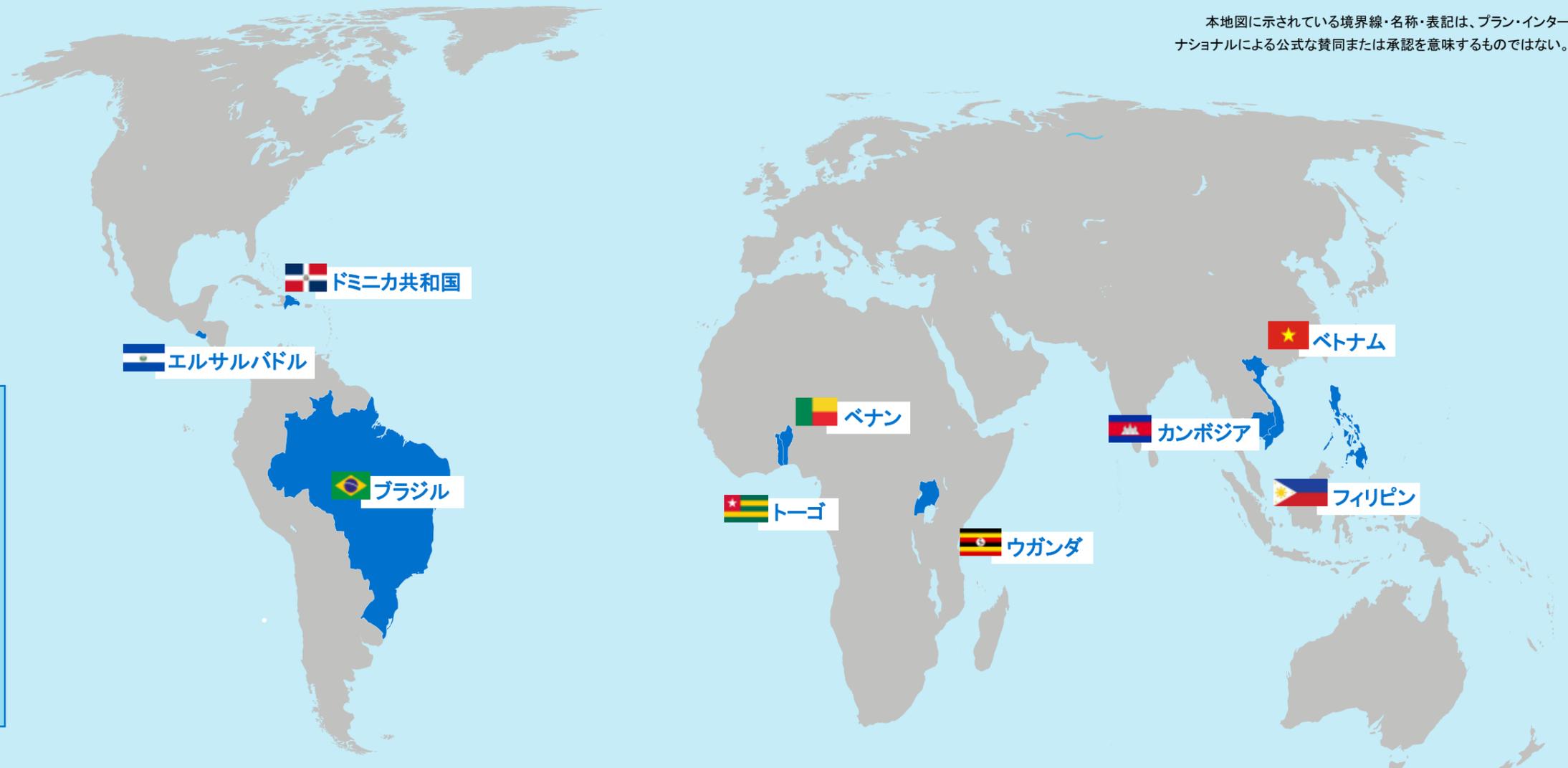
a 私たちは、ジェンダーは人びとのアイデンティティや表現に多様な形で影響を与える概念であり、性自認は男性と女性の二項対立を超えたものであることを認識している。ただし本調査では、対象集団の参加者を指す包括的用語として「女の子」を用いた。

 本調査実施国は
9カ国

 実施期間は
18年間

 調査開始は女の子が生まれた
2006年

 調査終了は女の子が18歳となった
2024年



それらの国々は3地域にまたがっている: アフリカのベナン・トーゴ・ウガンダ・アメリカ大陸のブラジル・ドミニカ共和国・エルサルバドル、東南アジアのカンボジア・フィリピン・ベトナム。本調査では毎年インタビューを実施し、女の子の経験・考え・抱負を彼女たち自身に語ってもらい、ジェンダー規範が彼女たちの生活をどう形成しているかに着目した。

同じ子どもの集団をこれほど長期にわたって追跡した調査はほとんど存在せず、また「現実の選択、現実の生活」は女の子だけに焦点を当てた唯一の調査である。女の子から直接聞き取ることで、本調査は彼女たちの言葉による、平等な世界の構築に対する意見・信念・提言を、長年にわたり独自の形で把握していた。育った環境は大きく異なっていたが、「現実の選択、現実の生活」の調査参加者の女の子の多くは、幼少期～思春期初期に、様々な面で多くの共通した経験があった。

彼女たち全員の共通点(出生年以外)は、それぞれの環境下での最貧困層の世帯、または最貧困層のコミュニティに属していたという点であり、そのために本調査への参加を依頼された。

これまで「現実の選択、現実の生活」の調査は、世界の女の子の生活について豊富で注意深い観察を実施してきた。気候変動と貧困は彼女たちの機会を制限し、彼女たちの多くが家族を支えるために中途退学や有償労働を強いられていた。幼少期から彼女たちは無償のケアの重い負担を背負い、その教育・友人関係・幸福は犠牲になる場合が多かった。社会規範では、ジェンダーに基づく暴力(GBV)に対して、女の子は自分で対処するしかないとされ、彼女たちの多くが男性の暴力は「当たり前」と信じていた。

本調査では、2021年に女の子が15歳になった時点で調査に参加し続けていた全9カ国の女の子とその保護者104名^bの意見を分析した。

b 調査員は調査対象者の女の子全員と連絡を取り続けようと試みたが、参加中止を選択した者・調査対象地域から移住した者・残念ながら幼少期に亡くなった者もいた。ベトナムでは、2023年と2024年にある省に住む10名の女の子へのインタビューが実施できず、調査に最後まで参加した別の省の9名の女の子のみを対象に含めることにした。

c 本調査では、女の子の思春期でのジェンダー規範への抵抗がどう発展するかを分析するため、15歳時点で調査への参加継続をしていた女の子だけを対象とした。この分析は、13歳や14歳、またはそれ以前に参加を止めた女の子に対しては不可能と判断した。

 これまでの「現実の選択、現実の生活」調査をご覧ください (👉)

 「気候変動と女子教育: 障壁、ジェンダー規範、回復力への道筋」をご覧ください (👉)

 「時間がない: ケア労働におけるジェンダーギャップと、女の子への影響」をご覧ください (👉)

 「怖がって歩かなくていい: ジェンダー規範はいかに女の子の保護・危険・責任認識を形作るか」をご覧ください (👉)

女の子の抵抗: 現時点での知見

かつて国際政治において、子どもは被害者として描かれることが極めて多かった。

苦しむ子どもの画像は、不憫さを喚起し、特定の危機に対する国際的な行動を促すために利用された⁵。だが、それらの画像に登場する子どもは、自身に影響する問題について発言する機会をほとんど与えられず、大人の領域とみなされる意思決定の場から排除されてきた⁶。その結果、子どもとユースは、未だに危機の解決や平和構築に有意義な貢献ができる存在として認識されていない^{7,8}。女性と女の子の声を疎外し消し去るようなジェンダー規範や考え方に基づく様々なレベルにおいて、女の子が排除されていることが特に重要である⁹。

だが、女の子をすでに地球規模の問題の解決策を見つげられる存在として描写することは、彼女たちが自身の声を聞いてもらうために必要とする支援やリソースの存在を、結果的に隠してしまうことになりかねない。

加えて、女の子全員が輝かしい存在として描写される訳ではない。事実、彼女たちの多くはメディア報道では取り上げられず、黒人の・障害を持つ・クィアの・低所得国の女の子の活動は認知されていない。

そのもっとも顕著な例は、ダボス会議でのGreta Thunbergと彼女の仲間たちの写真が報道機関に公開される前に、その集団内で唯一の黒人・アフリカ人アクティビストであるウガンダの気候変動に対するアクティビストVanessa Nakateが切り取られていたことが判明し、その写真が拡散された件である¹²。別の事例では、Malala Yousafzaiが勇敢にも1人で学校へ通い、毎日命を危険に晒していたが、パキスタン・タリバンによる彼女に対する銃撃事件後のメディア報道は彼女を無力な被害者として描き、以後も、彼女の声より他者の声に主眼を置いてきた^{13, 14, 15, 16}。

女の子の被害者としての描写に異議を唱え始めたメディアもあり、彼女たちを大きな政治的変革を達成できる存在として描いているものもある。Greta Thunbergのような女の子のアクティビストは、驚異的な才能と能力を持つ存在として描写されている。そうした描写は、女の子が各々に国際フォーラムで訴え、何百万もの仲間を動員し、正に「1人の力で世界を変える」能力を有することを示唆している¹⁰。

① 女の子は、世界の危機を自ら解決したいわけではなく、大人が数十年間にわたる政治的無為を止め、彼女たちの抱える問題に対して行動を起こすことを求めているのだ¹¹。



全国子ども会議で女の子代表が質問する、ベトナム © Plan International



女の子たちは気候変動対策での生物多様性の重要性を理解している、フィリピン © Plan International

抵抗に関して 世界の女の子から学べること

世界中での女の子の政治参加には、一般には認識されていないものもたくさんある。近年、著名な女の子のアクティビストへの注目は高まっているが、女の子全員が国連に訴えたり抗議運動を先導できたり、それらを望んだりしている訳でもない。女の子が私たちに自分たちの話を語り、政治参加の一つの形である。

女の子の多くが、自身のコミュニティ内の規範や行動様式に疑問を持ち始めており、そうした規範や行動様式に抵抗し始める者も現れつつある。また彼女たちの多くが、大人たちに対して、彼女たちが直面する問題にもっと本腰を入れて取り組むよう求めている。

本報告書では女の子が日々ジェンダー規範にどう対処し、受け入れ、時に抵抗するといった、彼女たちの日々の戦略を調査している。そして本報告書は、期待されるジェンダー役割分業に対して彼女たちが疑問や批判、拒絶を感じ、規範に逆らう瞬間を記録する一方で、それらを受け入れ、支持し、順応し、ときにはそれを強化して規範に従う瞬間の存在も確認している^{1,2,3,4}。

女の子がジェンダー役割分業に抗う意見や行動を示すとき、私たちはそれを女の子の**日々の抵抗**と呼ぶ。

女の子にとって、日々の変化と抵抗はどのようなものか

- ➔ プラン・インターナショナルは、女の子と彼女たちのコミュニティが身の回りのジェンダー不平等を認識し、改善していく力を備えるよう支援することを目的としている。
- ➔ 「**現実の選択、現実の生活**」の調査参加者の女の子から、彼女たちの声が届き、変化へとつながるためにはどのような点を強く支援すべきなのかを特定しようと試みた。
- ➔ そのため、本調査は女の子の日々の抵抗に焦点を当てている。ただし、その抵抗を女の子の日常の政治をめぐるより広い連続体の中に位置づけ、本報告書ではこの広い枠組みにも言及している。



国際開発の分野でも、女性や子どもを人道危機下における受け身で痛ましい被害者とするイメージから、低所得国に住む「幸せでエンパワーされた」人びとという前向きなイメージへと移行がみられる¹⁷。

女の子と女性が収入を得る機会を与えられた場合、男性と男の子と比較して、その収入を家族やコミュニティに投資する傾向が強いというエビデンスに基づき、多くの開発機関は女の子を対象としたプログラムを展開している^{18, 19}。

しかし、それはメディアによる女の子のアクティビストの輝かしい描写と同様の憂慮すべき事態を生み、コミュニティ全体を貧困から救い出すという極めて重い負担を、女の子に課している²⁰。

この言説はまた、世界的な貧困を持続させている経済システムや権力関係に対する批判を覆い隠してしまう。それらは個々の女の子の統制や影響の及ぶ範囲をはるかに超える問題である²¹。重要なのは、こうした「女の子の力」という描写が、特定のかたちのエンパワーメントを促進している点である。その結果、女の子の権利への投資は、彼女たちが将来、他のすべての人のために達成すると期待されるさまざまな開発成果を根拠として正当化されることになる^{22, 23, 24}。

女の子は現在、彼女たちがすでに無償の家事労働への従事により大きく貢献していることは評価されず、経済活動をしていない「活用すべき」リソースとして描写されている²⁵。

女の子が主に将来の経済主体として位置づけられる場合、焦点はほぼ完全に教育と経済的エンパワーメントに移ってしまう。その結果、GBVや性と生殖に関する健康(SRH)など、彼女たちが得ようとする基本的権利に対する、他の多くの障壁が隠されてしまう^{26, 27, 28}。

❗ 女の子自身を対象としたこれまでの調査では、彼女たちが本格的に政治的な参加をした際に、無力感を感じる人が多いことが分かった。

それらの調査によると、女の子の参加は極めて制限されており、大人は彼女たちの変革への取り組みを大人主導のフォーラムに対し「適切」とするようになっていることが判明した^{29, 30}。女の子は、自身だけで変化を起こそうとしているのではなく、目標達成のため、大人に支援の強化を求めていることは明らかである^{31, 32}。また彼女たちは、単独行動より集団的活動を望み、協力して取り組むことを重視している³³。

公式の場以外において、女の子が政治的行為を「実践」しているという認識は重要である

- ➡ 調査によると、女の子は多くの「日々」政治的行為を行っており、それは平凡にみえるかもしれないが、自身と仲間の高い自由度の獲得を試みるものであり、直面している不平等に挑むことができているという³⁴。
- ➡ 「現実の選択、現実の生活」のこれまでの調査により、女の子が移動に関する男の子との友人関係構築など、生活のほぼあらゆる面でジェンダー不平等に挑んでいることが明らかである^{35, 36}。
- ➡ 現状に対して疑問を抱いたり、今とは異なる未来を想像したりすることから生まれる日々の行動自体が、女の子の活動の強力な形態となり得る³⁷。



これまでの女の子による抵抗についての情報に基づき、本報告書では彼女たちが幼少期～思春期にかけて不平等に対してどのような疑問を持つかを理解するとともに、彼女たちが変化を生み出すために必要とする支援を検証する。

本調査の対象者の女の子は、極めて多様な背景を持ち、必ずしも自身をアクティビストとは認識してはいなかった。それにより、たとえ自分自身では「政治的」な活動をしているという意識がなくても、世界中の女の子が変革を起こしていることがわかった。

本調査は女の子を応援する人びとにとって、心強い情報を提供するが、同時に誤った期待を抱かせないように注意を払っている^{38, 39}。私たちは多くの状況下で、女の子が主体性を発揮する際には大きな危険が伴うことを認識しており、特に女の子の権利に関する進展への脅威や後退がみられるような流れが世界中に見られる中で、その危険性は著しく高い^{40, 41}。私たちが理解しようとしていることは、その点ではなく、彼女たちが現在、どのような形の抵抗に関与し、どのような障壁を経験し、彼女たちが望むコミュニティの変化の実現のために大人からどのような支援を求めているかである。

私たちは、女の子のエンパワーメント活動が女の子を対象とした優先事項と必ずしも一致しない場合であっても、彼女たちの「具体的かつ独自の欲求」を理解し、真剣に受け止めることを目指している⁴²。



友人や家族と話す女の子たち、トーゴ
© Plan International / Rafael Gardini

女の子の日々の政治的行動の理解の仕方

女の子の日々の政治的行動は複雑である。私たちは、女の子のジェンダー規範の受け入れ・抵抗する様々な形を分類・理解するための枠組みを開発した。その枠組みで主体性は、様々な程度を有するものとして捉えている。

私たちは「**現実の選択、現実の生活**」の調査対象者の18年間のデータを分析し、女の子の発言・見解・経験が支配的なジェンダー規範に沿うものか、抵抗するものかを調査した。この手法を、全9カ国に存在するジェンダーロールへの期待に「応える」もしくは「逆らう」を判別する手法と表現している。

それらの規範には、男性が稼ぎ手であり経済的決定権を持つこと・女性がケア労働と家事労働を担うこと・男性は元々攻撃的である(これがGBVにつながる)ということ・特定のキャリアが男性/女性だけに適していること・政治的代表的地位が男性を圧倒的に優遇していることなどが含まれる。

女の子の日々の政治的行動には、ジェンダー規範の遵守と挑戦が含まれる。「**応える**」ということは、期待される行動の受け入れ・支持・強制を意味する。「**逆らう**」ということは、それらに対する疑問視・公然とした批判・完全な拒絶を意味する。

私たちは女の子が規範に挑むような行為を、**女の子の日々の抵抗**と呼ぶ。

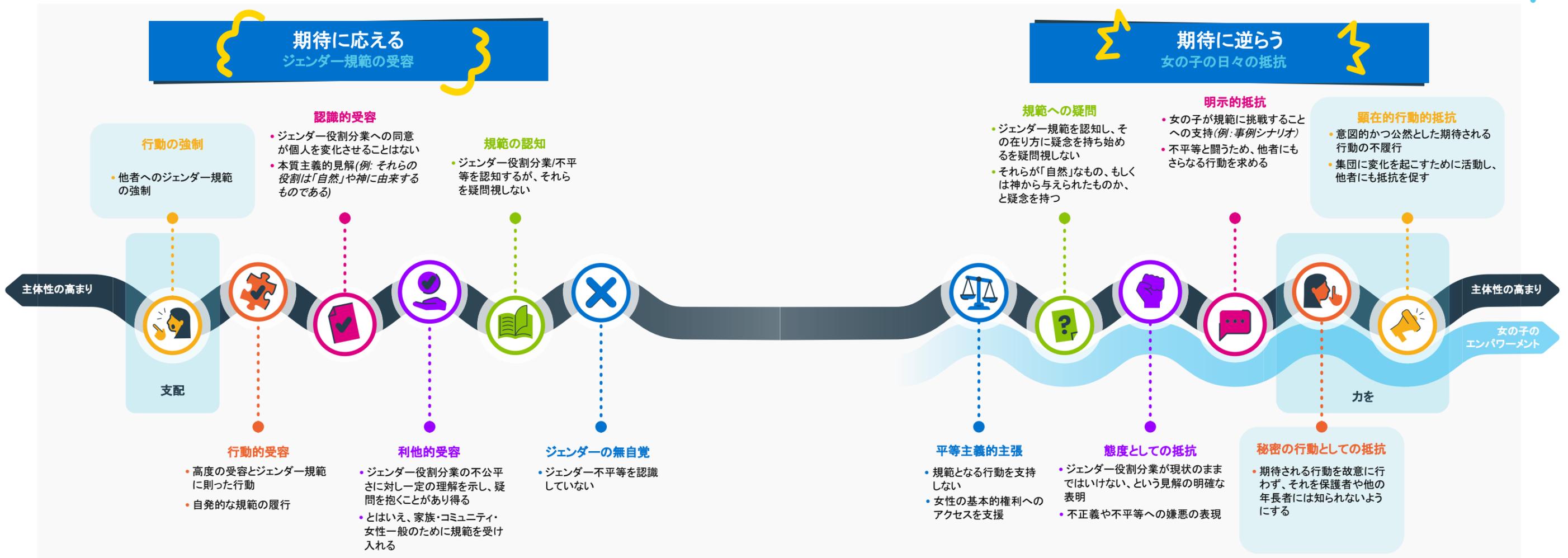
主体性と抵抗を混同し、女の子が**抵抗**する時にだけ主体性を発揮していると考えないことが重要である。主体性とは、女の子が意思決定を行い、自身の人生を形作り、自身の環境に影響を与える能力を指す。彼女たちは、自身の行動がジェンダー規範を支持し、期待に応える場合でも主体性を発揮し得る。例えば、女の子が中途退学して甥や姪の世話をすることを選択し、彼らの父親(彼女の兄弟)が働いて家族を養うことを可能にさせる場合が挙げられる。

その決断はジェンダー的な労働の形に抵抗するものではないが、女の子が自身の意思決定を行うという主体性を発揮した例である。

したがって、本枠組みでは、主体性は尺度上の中心点から両方向に向かって強まるものと捉えている(➡ 図1参照)。

本枠組みに関する詳細な議論については、**技術報告書**をご覧ください➡





➡ 図1 女の子の日々の政治的行動の枠組み

➡ 図1 女の子の日々の政治的行動の枠組み



コミュニティで不審がられ自信を失い、不安を感じつつも、オートバイの修理技術を習得しているユース女性、カンボジア
© Plan International

女の子と保護者の発言の分析の際に、私たちは彼女たちのジェンダーに対する全体的な姿勢を「応える」または「逆らう」と定義しようとはせず、その成長過程における彼女たちの経験の複雑さの理解に努め、不平等に抵抗する余力があるかどうかを探ろうとした。その流れで私たちは、彼女たちの考えが様々な問題で時には衝突し、時間の経過とともに変化し得る点に関心を持っていた。

.....
女の子がジェンダー規範にどのように抵抗してきたかを聞くことで、私たちは沈黙や秘密が主体性の形となり得ることを認識できた⁴³。

多くの状況で、女性が声を上げることは極めて危険で、沈黙が抵抗の1つの形として採られることがある⁴⁴。

.....

したがって私たちは、女性の沈黙が力の源となり得ること、そして力を持つ者への抵抗や、生き残りをかけた交渉の手段ともなり得ることを認識している⁴⁵。例えば、私たちの分析から、女の子が頻繁に故意にジェンダー規範に背きつつも、そのことに関して黙っているといった、秘密裏な抵抗行動を取っていることが明らかになった。そうした行為は、たとえ規則を公然と問いただすものでなくても、大きな主体性を示すものと、私たちは捉えている⁴⁶。

私たちの分析は、規範に応えることから逆らうことまで、すべての女の子の日々の政治的行動の全範囲を網羅しているが、本報告書では日々の抵抗に焦点を当てている。すべての女の子が公然とした抵抗行動を行うべき、と提案するものではない。彼女たちの多くにとってそれは、非現実的・危険である。私たちの目的は、彼女たちが主体性を持って行動できると感じる瞬間と、彼女たちがジェンダー規範に挑む際に必要な支援を探ることである。

女の子の日々の抵抗の形

以下は、私たちの枠組みに基づいた女の子の日々の抵抗の様々な形の説明である。

「現実の選択、現実の生活」調査の調査対象者の女の子とその保護者の例を基に、女の子が規範に応えることから逆らうことまでを含む、「政治的行為を行う」形の例を示す。



行動の強制

女の子やその保護者が現在のジェンダー役割分業を当然であると信じるだけでなく、積極的にそれらの役割を担い、他者にそれを強いることを指す。例えば、トーゴのAla-Wonilは長年、女の子が家事をすべきだという考えを受容するだけでなく、熱心にその仕事を担い、妹にも家事の仕方を教えていた。



行動的受容

ジェンダーに関する特定の規範を受容し、積極的にそれに従うことを指す。例えばウガンダのAmelialは、母親が許可しなかったために男の子と遊ばないようにしていたと2014年のインタビューで述べた。



認知的受容

ジェンダー役割分業は生物学(ジェンダー本質主義)/神によって決められたもので、変えることができないという見解を反映したものである⁴⁷。例えば、ブラジルのCamilaは2023年にインタビューを受けた際に、家族の幼い子どもの世話のために中途退学しなければいけない可能性のある架空の女の子の物語に対して、男の子は子どもの世話ができないため、唯一可能性のある回避策は、父親が働きに出ている間は母親が家に居続けることだと答えた。



利他的受容

女の子や保護者が他者(特に女性)への圧力を軽減する、または家族全体の幸福を高めるためにジェンダー役割分業に従うことを指す。彼女たちのそうした役割を不公平とする認識の有無や、それらを生物学的/神により決められたものであるという考えに対する疑問視の有無は様々である。例えば2018年、ベトナムのTanは母親の疲労感を和らげられるため、一週間で一番好きな時間として、家事をする時間を挙げた。



規範の認知

女の子や保護者が、男性と女性、男の子と女の子に期待される行動の違いを認識しているが、それに対する意見を特に示していない場合を示す。例えばブラジルのBiancaは2018年、自身と妹が兄弟より多くの家事をさせられていると言うと同時に、全員が同じ分の家事をしているとも言った。彼女が不公平感を表したり、その規範に対する疑問を見せたりすることはなかった。



ジェンダーの無自覚

男女間で扱われ方や期待される行動に関して差異はないと主張する場合を指す。もし皆がこの見解を持つならば、実際には存在するジェンダー不平等の多くは決して是正されない。そのため、平等主義的な主張の1つであるとはいえ、私たちはこれを「規範に応える」とのみみなす。例えばベトナムのKimの母親は2021年、今では男女平等が実現しており、女の子は困難な状況にはない、と述べた。



平等主義的主張

ジェンダー規範に抵抗するような行動を伴わない、平等を支持することをぼかした発言を指す。例えばウガンダのSylviaの父親は、妻とは家族や家計に関する決め事は協力して行っていると、複数回言及したが、別の年には、自身が主な意思決定者であると発言し、矛盾する態度を示した。



規範への疑問

女の子や保護者が特定のジェンダー規範に疑問を持ち始めた場合を指すが、必ずしも不公平だという考えを明言しているわけではない。これには、行動パターンが自然や神により決定されているのかと問い始めることも含まれ得る。例えばドミニカ共和国のSaidyは2021年、自身のコミュニティで男の子に女の子より遥かに高い自由度が与えられていることに気づいたと言った。同じ年に、保護者の多くと何名かの女の子は、女の子が暴力に遭う危険性の高さをその理由としたが、彼女はただ、そうである理由がわからないと発言した。



態度としての抵抗

女の子や保護者の、ジェンダー役割分業や規範が不公平であり、変えるべきであるという見解を指す。例えばフィリピンのJacquelineは2018年、自身のコミュニティで男の子が女の子より家事をしないことは不公平だと述べた。



明示的抵抗

女の子が、たとえ自身での抵抗は不可能と感じていても、ジェンダー規範への抵抗という考えを支持する場合を指す。例えばベトナムのYenは2024年、大人は女の子の意見に耳を傾け、女の子には自分の人生を決める能力があると信頼されるべきであると述べた。



秘密の行動としての抵抗

女の子が故意にジェンダー規範を破る行動を採り、そのことを秘密にしておくことを指す。例えばベトナムのAliceは2023年、有償労働をしていたが、彼女の就労を認めない父親にはそれを隠していた。



顕在的行動的抵抗

女の子が規範となる行動に公然と背くことを指す。例えば、ベトナムのLyは2016年、母親から報酬をもらえるときだけ家事をすると発言し、エルサルバドルのRaquellは2021年、自分が好きな家事だけをすると言った。

「現実の選択、現実の生活」調査対象者 でみられた女の子の日々の抵抗

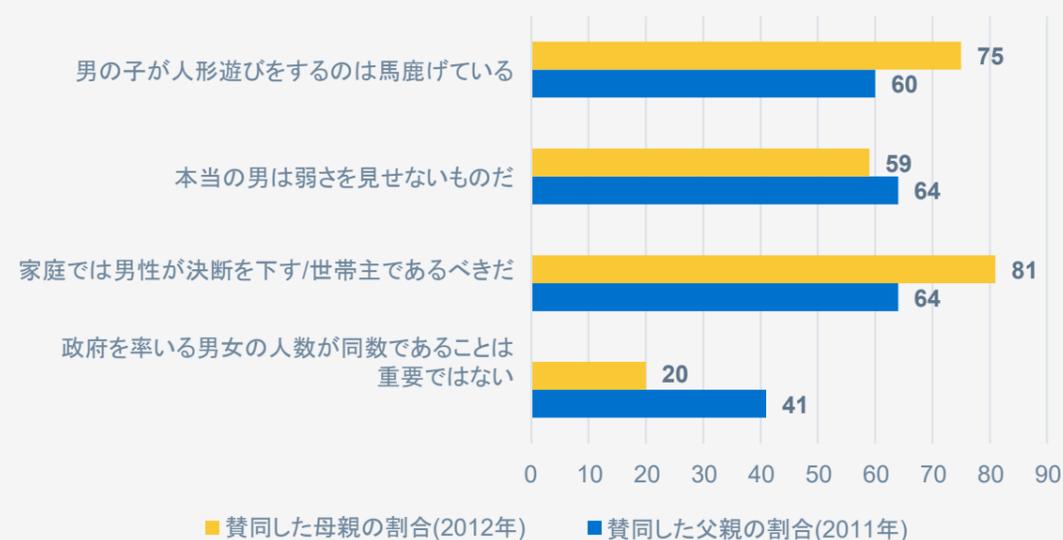
「女の子は社会規範に従うべき」：女の子の抵抗を生む環境を 形成する保護者

女の子がジェンダー規範に抵抗する際に、抵抗が可能な環境なのか、もしくはそれが難しいのかということについては、保護者の見解が重要な判断材料となる。

各国の対象者の保護者の多くは、機会均等、特に教育の享受と一定程度の政治参加機会の平等、を支持していた。保護者は早すぎる結婚(児童婚)に

強く反対し、女の子の教育が児童婚によって脅かされるべきではないと考えていた。母親と父親は理論的には、政治参加機会の平等と女の子のスポーツへの参加を支持したが、男性の感情の表出や男の子の人形遊びに関しては、支持の度合いに若干の差がみられた。

◆表1 保護者の規範的考えの支持度



❗ 保護者の多くが女の子の平等な機会への支持やジェンダー規範に対する疑問を示した一方、その行動や見解はそうした信念と矛盾したことが多かった。

彼らの多くはまた、女の子は従順で多くの家事の責任を負うべきだという、本質主義的な見解を持っていた。

その結果、女の子の多くは、保護者が彼女たちに望んでいた通りの機会を得たとしても、その機会の中で成長するのに苦労した。

家事労働に関し、複数の保護者は、インタビュー時に自身が説明した家事の分担状況とその理由に対して大きく矛盾する、平等主義的な見解を述べた。

例えばカンボジアのDavyの母親は2019年のインタビューで、「男の子と女の子は同じ家事責任を担うべきだ」という主張に賛同し、「男女どちらも、家事も農作業などの屋外の仕事もできるから同意します」と述べた。だが、同インタビュー中で彼女は別の箇所、Davyが彼女の兄弟より多くの家事をこなす理由について「私が疲れてしまう時があって、彼女に皿洗いを頼みます。彼女には、それは女性の仕事だから、と言っています」と発言した。

Davyの母親は、Davyが兄たちと一緒に農作業に加わることを認めていると話す一方で、「息子たちは何もしません。学校に行き、ごはんを食べ、遊びに行くだけです。時々家事を頼むこともありますが、ごくまれです」と語った。彼女は、息子たちよりもDavyの教育を優先したいと述べるなど、その教育を強く支持していたが、Davyにより多くの家事を担わせることが学業に悪影響を及ぼしかねないという点には気づいていないようだった。

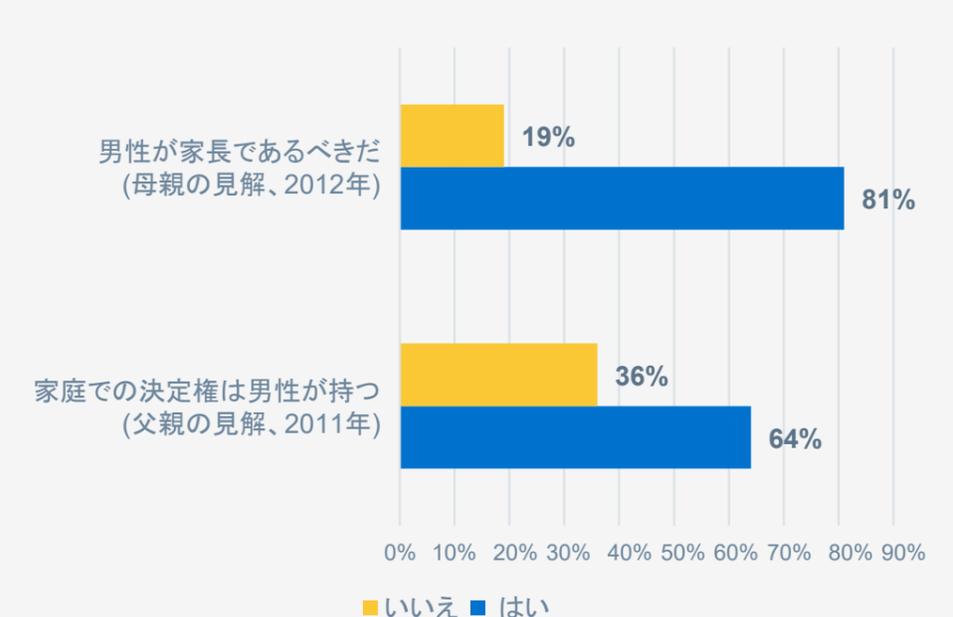
保護者が女性を家庭内の役割と結びつける場合、男性を当然の稼ぎ手であり意思決定者とみなす傾向も見られた。2018年、トーゴでAla-Woniの父親は、「父親である男性が決定を下します。男性が家にいない場合には、女性が決定を行います」と説明した。

母親の収入が父親のものを上回っている場合でも、父親が依然として世帯主であり、主な意思決定者とみなされていたこともあった。ベナンのAnnabelleの家族もその一例で、父親は自身の稼ぎが妻の週給の半分以下であっても、自身を家族の「リーダー」と称し続けていた。

「家族は妻と私の働きのおかげで安定した生活を送っています。家族のリーダーとして、私は大きな支出については決定権を持っていますが、リーダーとしての決断を下す前に家族内で合意が成されているので、大きな問題は起きていません」

Annabelleの父親、2015年、ベナン

◆表2 保護者の意思決定に対する見解





授業中に回答するために挙手する女の子、ウガンダ
© Plan International / James Mbiri

男性を世帯主であり意思決定者とみなしながらも、保護者は男性的とされる行動を、一貫して強く否定的な表現で描写した。

彼らは息子たちを制御不能・怠惰な・言うことを聞かない・時に彼ら自身や他者にとって危険な存在、と描写した。保護者は頻りに自身の息子を「手に負えない」「怠惰」「自己中心的」とラベリングし、どうせやらないからと決めつけて、彼らの家事の責任を少なくすることを正当化し、制限にも従わないだろうという前提のもと、高い自由度を与えていた。

保護者の男の子の行動に対する見解は、いくつかの事例によって明らかに矛盾していることがわかる。例えばウガンダのMirembeの母親は2019年、女の子は元々しっかりしているとしながらも、男の子に対する心配は女の子より少ないだろうと語った。

同様に、エルサルバドルのRebecaの叔母は2020年、「女の子は慎み深くあるべき」と感じていた一方、「男の子は小さな男性のようなもので[...]幼い頃は未熟だったり、騒いだりしてもいい(笑)」と感じていた。またトーゴのAnti-Yaraの母親は2019年、女の子の方がしっかりしているが、経済的決定は男性がすべきだと述べた。

保護者の男性性に対する意見は一貫して否定的であったが、彼らは男性や男の子に家庭・時には国家レベルに至る、あらゆる機会と責任を委ねるべきなのかを疑問視する様子は見せなかった。

.....
保護者が男の子の学業への注力の不足・勤勉さの不足・コミュニティ意識の低さを認識し、時には強い動機付けや激励が必要とみなした結果として、男の子は姉妹よりも多くの機会を与えられることが多かった。
.....

❗ 女の子は「悪い」選択をしない、と信頼されることが多いが、自身の人生に関して前向きな決断を下せる機会はほぼ与えられない。

調査対象者全体で、彼女たちの保護者に認識されていた場合もある、自身の誤った選択(負の主体性)の責任を負われる女の子が何名もみられたが、正しい選択をする責任や自身の人生・家族・コミュニティのプラスになるような影響力を発揮する権利(肯定的な主体性)を託されることはまれであるという傾向が一貫して確認された。

その矛盾は、特に女の子の性と生殖に関する健康と権利(SRHR)に関して顕著であった。

女の子は、「悪い」友人たちの影響を受けたり、「不適切な」服装をしたり、夜遅くまで外出したり、性的関係を持ったりした場合、常に非難の対象とされてきた。しかし彼女たちが、健康と幸福の管理のために必要な情報や医療サービスを提供されることは、ほとんどなかった。

例えば、ベトナムのLyが13歳であった2019年、母親は彼女の同級生に彼氏がいることを否定的にとらえており、インタビューで「彼氏を作ったらあんたを殺すと言ったのよ」と話した。同時に、Lyの母親は娘を自身の身体や恋愛関係に伴うことを学ぶ責任もなければ十分な歳に至ってもいないと考えていた(「まだ幼過ぎて何も知らないから、妊娠や出産について彼女に話したことはありません」)。

時に、ジェンダー規範に抵抗した母親でさえ、娘にそれらを強い続けることがあった。全体的に、女の子の抵抗に対する世代間支援は限られているようだ。ウガンダのNimishaの母親は、路上で強盗未遂に遭った際に非常に勇敢に闘った出来事を語った。彼女は衣服の下に金銭を隠していると3人の男に決めつけられて、公の場で衣服を脱ぎ、その男たちは結局逃げ去ったという。だが彼女は、レイプに遭う危険があるユース女性にはそのような行動は不可能だと論じ、その脅威を懸念し、彼女はNimishaの移動を制限し続けた⁴⁸。



子どもとユースのエンパワーメント支援への誓約書に女の子たちが署名する、ベトナム
© Plan International

月経は調査対象国9カ国すべてで、新たな制限や規範のきっかけとなることが多く、女の子の人生における重要な転換点として挙げられた。



- ① トーゴのDjoumaiやフィリピンのChristineなどによると、女の子の多くは月経が始まったら、行動を「改める」ように、とただ告げられた。
- ① 月経開始に伴い、ブラジルのAmanda・フィリピンのDolores/Jasmine/Reyna・ドミニカ共和国のGriseldaなど、女の子の多くが男の子と遊ぶことを禁じられた。
- ① ウガンダのAmeliaは、保護者が同様の制限を課した結果、11歳から男の子との交流を完全に断つことになった。
- ① フィリピンのRosamielは、一切の交流を禁じると告げられたという。一方、Reynaの母親は、男の子の言うことに大笑いするのを止めるよう言ったという。

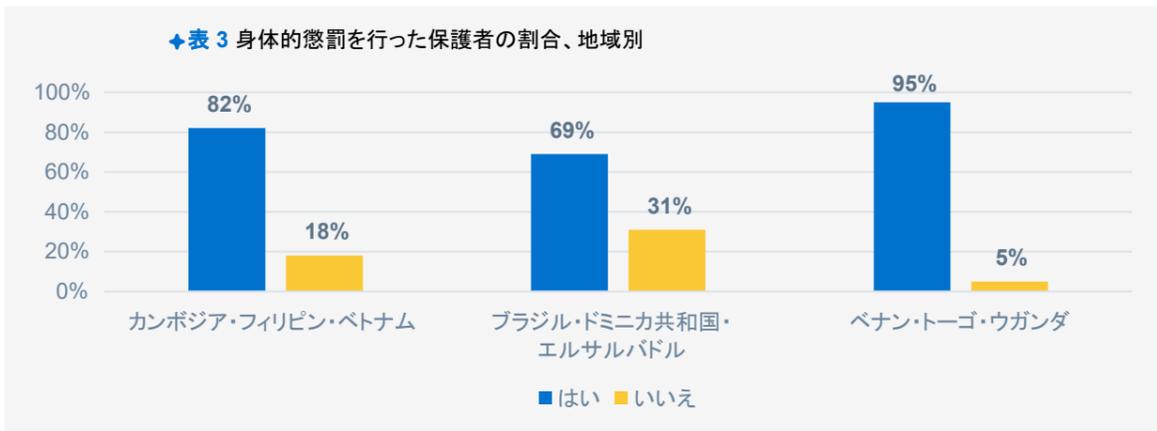
そして保護者は、女の子の月経が始まると、彼女たちの交流活動やコミュニティへの参加を制限するようになる。女の子は外出を控え、交流活動を控え、運動を控え、静かに笑うよう命じられた。

保護者が「当たり前」とみなす規則・役割に対して、女の子が疑念を示したり拒否したりすると、多くの場合、とりわけ家事を拒否した場合、身体的暴力を含む厳しい罰を受けた。例えばベナンのLayla・ウガンダのRebeccaとJoy・フィリピンのChesa・ベトナムのYenの保護者は、娘が家事をしなかったら、棒や鞭などで打つこともあると認めていた。また、外出や男の子との交流に関する規則を破った場合に、暴力で脅される女の子もみられた。

調査対象者全体で身体的懲罰が広く認められ、以下のように地域差もみられた。

しかしながら、3地域すべてで、規範に従わない女の子に対する身体的懲罰が確認され、83%の女の子が子ども時代に身体的懲罰を経験していた。

保護者の意見の間にはかなりの隔たりがあり、機会の均等を支持し、規範に対して疑問を抱く者、女の子が人生に関わるような決断を自分ですることは出来ないと主張する者など、様々である。そうしたジェンダー役割分業に関する意見は、貧困と不十分なインフラにより形成され、それらの要素が重なって、女の子の機会均等の可能性を制限している。したがって、保護者の考えは、女の子の抵抗が実現するか阻まれるか、その環境を構築する重要な要素である。



技術専門学校でロボット工学プロジェクトに取り組む女の子、エルサルバドル © Plan International

女の子の日々の生活での抵抗の物語

以下では、女の子の日々の生活での政治参加と、ジェンダーに関する保護者の見解や規範に対する抵抗の形の可能性の例として、彼女たちの意見と行動を取り上げる。

女の子がジェンダー規範に公然と挑むために重要な支援要素を欠いていることが、抵抗に関する彼女たちの経験談から読み取れる。公然とした抵抗に成功した女の子もいたが、彼女たちの多くはより控えめで戦略的な抵抗にとどまっていた。

本報告書では、特にジェンダー規範に抵抗し、規範に沿った行動に逆らう女の子の事例に焦点を当て、女の子の意見と行動を、彼女たちが枠組みのどこに位置づけられるかに基づき考察する。平等主義的主張・規範への疑問・態度としての抵抗・明示的抵抗・秘密の行動としての抵抗・顕在的行動的抵抗。

私たちの枠組みを指針として、女の子が変革を起こすことへの支援方法に明確な示唆を与える、いくつかの興味深い事例の特定ができた。



ユースクラブの友人と共にする女の子、カンボジア
© Plan International



「私たちはみな平等だ」: 平等主義的主張

「現実の選択、現実の生活」の調査では、大多数の女の子が、特に教育やキャリアにおいて、男女は平等な権利と機会を持つべきだと考えていた。進路選択がジェンダーの影響を受けることが多いと感じつつも、自由に移動する権利や、女性が経済的に自立することの正当性を信じていたのである。しかしその一方で、こうした価値観を持ちながらも、伝統的なジェンダー規範に対しては必ずしも強く抵抗しているわけではなかった。

それは女の子のジェンダー規範への抵抗における、重要な第一歩である。彼女たちの多くが平等という考えに関心を持っていたが、その考えを行動に移すのは難しいと考えていた。調査では、教育を受けたいという希望と同時に、全員が平等に教育にアクセスできることの重要性についても、彼女たちから聞くことができた。

.....
2018年のインタビューでは、女の子の99%が「男子と女の子が教育を享受する機会を平等に持てるようになるべき」という意見に賛成した。
.....

女の子は皆、女の子が就学することの重要性に同意したが、13%の女の子はその重要性の理由を説明できなかった。それは平等をある程度支持しているものの、彼女たちの生活を形成しているジェンダー規範を問いたず意欲や機会が必ずしも伴っているわけではないことを示している。

調査対象者の大多数の女の子は、学業修了後のキャリア構築での機会は均等であるべきとしていたが、彼女たちのキャリア選択は、ジェンダー規範やケア労働の提供を否定するほどのものではなかった。

2024年までに、最低でも20%の女の子が教師・助産師・看護師のいずれかになりたいと考えていたことは、調査期間を通して、彼女たちの中のかなりの人数が常にケアを提供する専門職を志してきたかを反映している。

「看護師になりたいです[...]他の人を助けられるように」

👤 Jasmine, 14歳(2020年)、フィリピン

「勉強ができれば助産師になれます、それが私の夢です」

👤 Fezire, 17歳(2023年)、トーゴ



鶏を飼育し、自身と母親を支えるために収入を得る女の子、ベナン
© Plan International

ケアを担う専門職は「他者を助けること」と結びつけられがちであり、ジェンダー規範の影響のもとで、女の子は「人を助けること」は女性に生まれつき備わった資質だと考えるように社会化されていく。

さらに保護者は、女の子が担う重い無償ケアの責任を「将来のためのスキル形成」と説明することが多い。こうした説明は、ケアを担うことが女性にとって自然であり、避けられないものだという考えを、女の子の中に一層深く根づかせている。一方で彼女たちは、男性が優位を占める分野で働くことについては、原則として概ね賛同していた。

2024年、私たちは女の子に、農業技術を学ぶことを志望し、同級生にも同分野への進出を働きかけている架空の女の子の物語^dに対する意見を聞いた。Tanは以下のように話してくれた。

「今は状況が変わって、女性は男性と同様か男性以上に多くのことができると思います。女性の多くは経済的自立を果たし、誰にも依存していません。ただ、そう考える人もいれば、時代遅れの考え方をもち、今の文化水準に追いついていない人もいます。そういう人たちは古い考え方を持っていて、[物語の女の子]は前向きな考えを持っていると思います。自己変容とは結局のところ、自身の人生を変えることなのです」

👤 Tan, 17歳(2024年)、ベトナム

平等と女性の経済的自立に関する、Tanの鋭く心に刺さる意見は、参加者の間で共有され、各国の女の子がその話に共感した。ベナンのAlice・Annabelle・Isabelleとドミニカ共和国のDariana・Raisaは、女の子と女性が何でもできることに関し、同様の意見を示した。

それらの女の子は、女性は「信念を持ち」「勇敢でたくましく」「覚悟があり」、「自身の人生を変えることに前向き」であれば、男性ができるあらゆることができると考えている。2021年と2024年に、彼女たちに「男子は女の子より高い自由度を持つべきだ」という主張への同意度を尋ねた。

❗ 2021年では、男子が女の子より高い自由度を持つべき、という考えに反対した女の子は59%だったが、2024年ではその割合は81.5%に急増した。

また、平等な自由の享受が実現すべきと信じる理由に言及する女の子もいた。男子と女の子が同じ権利を持つべき理由について、女の子の多くは、単純に「私たちは皆平等だから」(Raisa, 15歳(2021年)、ドミニカ共和国)と話した。

そうした意見は機会均等の支持という点で規範に逆らってはいるが、現地のジェンダー規範に対する核心的な疑問、真の平等達成に対し女の子が今もさらされている障壁の認識を必ずしも反映してはいない。

^d 物語の全容と付随する質問については、2024年版「現実の選択、現実の生活」技術報告書83ページ

「時間がない: ケア労働におけるジェンダーギャップと、女の子への影響」をご覧ください。



「育てられ方次第」: 規範への疑問

枠組みに沿い、以下では女の子が規範を疑問視する状況に焦点を当てる。彼女たちは、男の子と女の子が「こうあるべき」とされることに関する考え方に、その違いが自然なものか、または教え込まれたものかを問い直していた。

家事・移動や交流の自由・男性の暴力などのジェンダー規範が、生物学的ではなく社会的に決定されている可能性があることを認識し、疑問視し始めた者もいた。だが、そうした規範に疑問を抱いた場合でも、当該の状況に該当する女の子がそれを不公平と発言しようとはしなかった。

これは、子どもの遊びに関する規範に気づこうとしない、または公然と無視するといった単純なことも含み得る。例えばフィリピンのChristineは2014年、一番好きなおもちゃは何かという問いに対し、トラックが好きだけれど人形も同じくらい好きだと回答した。

時に、彼女たちの疑問視は明確に示された。例えばトーゴのAyomideは2016年、「男の子はサッカーをしてもいい」と口にし、そのことをどう感じるかと尋ねると「不快です。だから父に、どうして私はサッカーをしてはいけないのか理由を尋ねます」と答えた。インタビュー記録からは、ここでAyomideは男性親族・教師・彼女を排除した可能性のある男の子たちについて言及していたのかは判断できない。

❗ 女の子は明示的、または行動による暗示的な形で、ジェンダーに対する本質主義的見解への疑問を示した。



父親の役割に関する伝統的な男性のステレオタイプを見直すための活動に参加する父親たち、ドミニカ共和国 © Plan International

しかしAyomideの発言は、彼女が遊びに関するジェンダー規範を、自身に関する点だけでなく、彼女の遊びを妨げていた男の子や男性に関して、疑問視し始めていたことが明らかである。同様に、ドミニカ共和国のDarianaとトーゴのEssohanaのそれぞれの考察は、男の子に女の子より高い自由度を与えるという、広く根付いた子育てのやり方の基となる考え方に対する彼女たちの疑問を示している:

「どちらか一方に規範を設けるなら、双方に設けるべきだからです。つまり、男の子だからというだけで、女の子より高い自由度を与えられるべきではありません。どちらに対してもリスクが生じますから」

👤 Dariana, 18歳(2024年)、ドミニカ共和国

「男の子が自由であるべきだと、どこにも書いてありません」

👤 Essohana, 18歳(2024年)、トーゴ

平等な自由に対する一般的な支持を示した他の女の子とは異なり、DarianaとEssohanaは一歩踏み込み、直接的に不正義を指摘した。

男の子と女の子の生まれ持ったものとされる性質を疑問視する女の子もみられた。特に彼女たちの多くが、男性と男の子が生まれつき暴力的であるという点を疑問視した。

「昔はだいたい男性は女性より攻撃的でしたが、今では平等で、男の子は女の子と特に態度を変えることなく遊び、暴力的・攻撃的な行動はありません」

👤 Quynh, 15歳(2021年)、ベトナム

女の子の多くは、ジェンダー的行動は生物学的ではなく環境によって身につくものであるという意見を示し、男性の暴力は「育てられ方」(Bianca, 15歳(2021年)、ブラジル)または「家庭から学んだこと」(Rebeca, 18歳(2024年)、ドミニカ共和国)次第であると述べた。また「男性が[攻撃的]であるように教えられれば、そうなります」(Gabriela, 17歳(2024年)、ブラジル)とも指摘した。

「というのも、男の子と男性皆が女性に対して攻撃的という訳ではなく、女性を尊重する男性も実際に存在します。もしかしたらそれは彼らがどのような価値観に基づいて育てられたかに依るのかもかもしれません」

👤 Mariel, 15歳(2021年)、エルサルバドル

私たちは、「男性が皆攻撃的で暴力的な訳ではない」(Christine, 18歳(2024年)、フィリピン)という現実を周囲で目にした女の子が、規範に逆らう姿を認めた。Quynhは、自分の家族の力関係も例外的であると語った:

「それは本当じゃないと思います。たとえば家では、お父さんは物静かですが、私がいちばん怖いのはお母さんです。とても厳しいんです。それに、兄は優しい性格で、家の掃除をしてくれたり、料理も上手にこなしたりします」

👤 Quynh, 17歳(2024年)、ベトナム

女の子は自身の周囲の状況を観察し、彼女たちの人生に関わる人びとがジェンダー規範の理想から実際に逸脱しているのを目にすることで、教え込まれたジェンダーの本質主義的規範に疑問を抱くようになっていた。

それは規範に公然と抵抗するものではないが、ジェンダー役割分業が現状のままであるべきなのかを検討する上で重要な第一歩である。女の子の多くにとって、その考察はより積極的な抵抗の形態へとつながった。



自宅にいる女の子と母親、カンボジア © Plan International



「そんなはずはない」: 態度としての抵抗

以下では、女の子のジェンダー役割分業に対する強い嫌悪感・不正義感が表出する、ジェンダー規範への態度としての抵抗に焦点を当てる。

態度としての抵抗の重要な特徴は、彼女たちが、秘密性が保証されたインタビュー以外での意見の表明や、保護者に対するあからさまな反抗といった、さらに明確な形でジェンダー規範への抵抗は出来ないと感じている可能性がある点である。

❗ 女の子の多くは、ジェンダー役割分業や規範に対する疑問を示すだけでなく、それらが男の子に有利で不公平なものであると認識していた。彼女たちは特に、現状の家事分担の取り決めが不公平であると主張した。

2017年までに、ウガンダのSylviaは学校で女の子が男の子より多くの雑用をしていることに気づき、不公平だと感じていた。トーゴのAnti-Yaraも2019年と2021年に雑用の分担に対し不満を示し、トーゴのLadiも2021年に兄弟についてこのように語った。「彼らは今も農作業はするけど、女の子の仕事だからと言って家事は嫌がるので、腹が立ちます」。ブラジルのGabriela・Bianca・Camillaは2015年～2019年、男の子が女の子より家事の責任が少なくより遊びに時間を費やせるのは不公平だと述べた。Camillaは、彼女の兄弟が彼女より家事をしないと、こう述べた:

「自分の家なのに、彼らに頼むと泣くので[女性]がしないといけません。男性は何もせず見てるだけ。それがカッコいいとは思いませんが」

👤 Camilla, 12歳(2018年)、ブラジル

その不平等から、Camillaは男の子が遊ぶのを楽しめる一方で自身ができないのを悲しく感じていた(「悲しい、ただ従うしかないの」(2018年))。

カンボジアの女の子の何名かは、家事責任の分担への不満を口にした。Nakryは2016年(10歳)、「男の子が水汲みに行っている間、男の子は怠け者なので女の子が家の周囲を掃除するの」と訴えた。

Sothanyも2016年(9歳)、女の子には保護者の手伝いを期待されている一方、男の子が行わないのを不公平だと感じていた。「不公平だと思います。家の手伝いをする男の子はほとんどいないのです。男の子が手伝わないのはとても悪いことだと思います」。フィリピンのDarnaは2012年(6歳)、兄が家事をせずにバスケットボールをする姿に怒りを覚え、学校では男の子が騒いで女の子の物を壊すのを嫌がり、それらの状況への怒りを語った。

エルサルバドルのGladysは2021年(14歳)、女の子と男の子が期待される行動の違いについて話してくれた。「男の子はどこへでも行けるけど、女の子は行けず、ずっと家にいなければいけません」。彼女はそれを不公平だと感じていた。「おかしいです。そうではなく、皆平等に扱われるべきです」。フィリピンのJasmineも、Gladys同様に政治参加に関するジェンダー的規範に抗い、不公平さを直接指摘することで、態度としての抵抗を示した:

「女性は意思決定に関与していないようですが、それは不公平です。指導者のほとんどが男性で、それも不公平です」

👤 Jasmine, 18歳(2024年)、フィリピン

女の子の中には、保護者への反抗さえほめかす者もいた。ベトナムのLyとエルサルバドルのGabrielaは、課せられた役割への抵抗手段として保護者への反抗をほめかした。ベトナムのLyは2015年、ジェンダー的役割の不公平さを認めた。

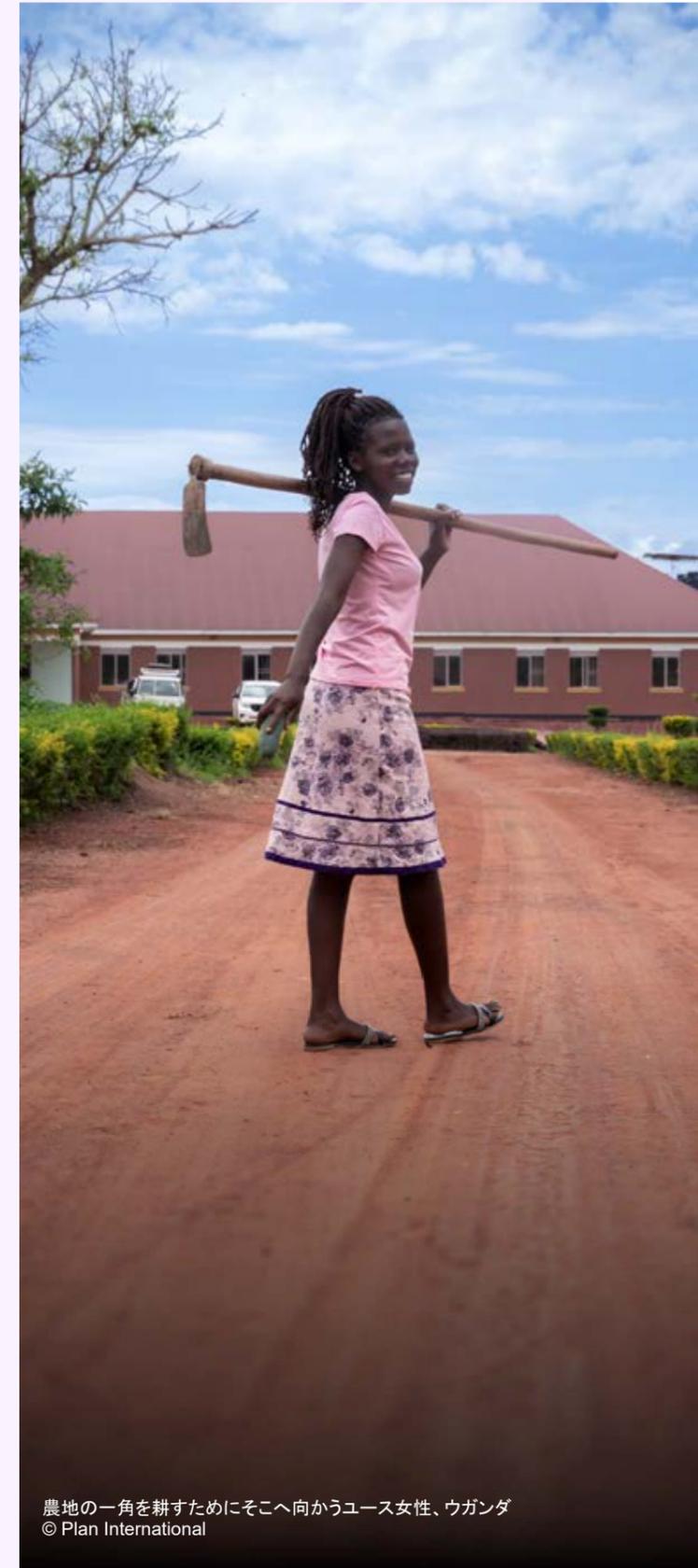
「疲れと、不公平さを感じます。女の子は従順だから、たくさんの仕事をこなさなければいけない...だからますますそうさせられるのです。男の子は家事をしなくてよく、ただ遊びに行くだけです」

👤 Ly, 9歳(2015年)、ベトナム

彼女の事例で注視すべき点は、その姿勢が時間とともに変化した点である。彼女は2016年(10歳)までに、大人に言われたことを女の子が無視して、その結果何が起ころうともう気にしていないと語り、反抗する意思の高まりと抵抗の形の変化を示した。Gabrielaは2020年(14歳)、祖母や叔母の家に行く時に、いちいち父親の許しを得ることはしないと告げた。父親はそれを知っており、「ああ、時々私に反抗したいのだな」と語ったが、彼女がそれを実行に移すまでにはいたらなかった。たとえGabrielaが、父親が彼女に従わせている行動規範にあからさまに背けるとは感じられなかったとしても、それは態度としての抵抗の1つの形であった。

それらの情報から、女の子がジェンダー役割分業や規範に対して不正義感を頻繁に示していたことがわかるが、それは態度としての抵抗の重要な形である。

彼女たちは、自身に期待される行動や役割に不満を抱いていたものの、その気持ちを率直に口にできるとは思っておらず、仮にそうしても大人が真剣に受け止めるとも感じていなかった。



農地の一角を耕すためにそこへ向かうユース女性、ウガンダ
© Plan International



「コミュニティは女の子を助けるべき」：明示的抵抗

❗ 基本的権利の享受のために公で訴えることを支持した女の子は93%に上った一方、そのうちの87%は、自身のコミュニティでそうした行動を起こした女の子はいないと答えた。

明示的抵抗とは、女の子がジェンダー役割分業の不公平さを認識し、たとえ彼女たちがインタビュー時以外でこの問題について発言していなくても、それらに抵抗することを支持したり、大人や権威に対するジェンダー不平等への対策を求めていたりする状況を指す。重要なのは、彼女たちがジェンダー不平等の継続に寄与する大人の役割を認識している点である。彼女たちがジェンダー平等の実現に対する責任を自身だけが担うべきではないと認識しているため、それは女の子の日々の抵抗の強力な形である。

家事分担への不公平感を強く感じ、家事の均等な分配の必要性を主張し始めた女の子もいた。女の子の多くが幼少期は家庭内での役割を受け入れていたが、思春期を迎える頃には変化を求めようになった。それはドミニカ共和国の女の子の多くに共通する傾向だった。例えばGriseldaは2019年(13歳)、「男の子も女の子と同じ義務を持つべきです！[...]彼らは怠け者で、家事をしません」と述べた。Darianaは2019年、兄弟に家事をもっとしてもらいたいとし、「[おかしいです]男の子も家事はするべきですから」と主張した。2019年にNicollは、男の子と女の子の間の家事の不平等な分担と、男性の家事への関与の欠如との関連性にまで踏み込んだ指摘をした：「そうして慣れてしまうから、大人になって結婚しても何もしないのです」。

フィリピンのReynaは12歳の時、クラスの男の子数人が彼女をいじめて彼らのために雑用をさせようとしたと語った。彼女自身では彼らに立ち向かうことができなと感じたが、教師に報告することで、不平等への対応責任を大人に課した。これは明示的抵抗の重要な形である。

保護者は一般的に男性が世帯主で女の子は意思決定能力がないとみなしていたが、調査対象者の女の子の少数は、家族内の意思決定に関与できていた。例えばブラジルのSofiaは2023年(17歳)、食料・教育・支出に関する決定に際し、自分も意見を述べたいとしていた。意見できることをどう感じているかと尋ねると、彼女は「意見を聞かれなかったら、いつも大変悲しいです」と述べた。翌年(2024年)に彼女が、女の子が自身の人生に関して自由に決定できるべき、という意見に賛同したことは驚くべきことではなく、彼女はコミュニティの意思決定において、女性の関与は重要だと発言した。「だって、そこにいるべきなのは男性だけじゃないでしょ」。同様にカンボジアのNakryも2021年(14歳)、大人は女の子の意見に耳を傾けるべき、という意見に賛成し、「女の子はよい意見を持っています[...]女の子は自身で決断でき、生きる・成長する・自由を享受する権利を有しています」と述べた。意思決定は、フィリピンの調査対象者の女の子の間で明示的抵抗の重大な対象テーマとして示された。

.....
女の子の関与の支持だけでなく、現在の意思決定の場から排除されている状況に対する不正義感を示した女の子も何名かいた。
.....

Kylaは2020年(13歳)、「大人は子どもをより信頼すべきです」と述べた。Reynaは2022年(15歳)、将来リーダーとなって抗議運動・政治的キャンペーンに参加したい、と述べたが、そのためには大人が女の子を支援し、権力者に彼女たちの意見を伝えることで「私たちの代弁者となる」必要があること訴えた。ブラジルのBiancaは2021年(15歳)、女の子自身が自身の身を守る責任を負う、という考えを否定し「彼女たちは1人にされるべきではなく、コミュニティからの支援も必要です」と述べた。



サッカーの練習でスキルを上達させている女の子、ベナン
© Plan International

翌年には彼女の批判は鋭さを増し、説明責任の要求に至った。彼女は性とジェンダーに基づく暴力を自身のコミュニティでもっとも緊急の問題であると、公共空間で女の子が感じる絶え間ない恐怖に言及した。

「それは...私たち...女の子と女性にとって逃れられない危険性です。夜道を歩くと、すべてが不安で恐怖を感じます。世間には悪い人が沢山いて、脅威を感じて...何か...レイプか何か他のことが起こるかもしれない、と恐れています」

👤 Bianca、16歳(2022年)、ブラジル

だが、同インタビュー時に彼女は「学校では[そうした問題について]教わりません」と話した。その理由を尋ねると、彼女は「きつと、私たちにそのような問題、つまり私たちの権利について知られたくないからです」と答えた。Biancaは、大人の無為だけでなく沈黙も、女の子と女性への暴力を継続させる要素として認識し始めていた。明示的な抵抗の重要な形は、彼女たち自身の身体を他者に支配されないことと、SRHIに関する知識の獲得への強い願望であった。調査対象者の女の子の中でCSEを受けた者はほとんどいなかった。

女の子の83%が、量的・質的に充実した性教育を望むことを示したことがあった

❗ これも女の子が、ジェンダー不平等を生み出す要素であると特定し、大人がそれに対応するためにできることを指摘した領域の1つである。だが、娘とこのテーマを率直に話し合う保護者はごく少数であった。

❗ 保護者は娘とのこのテーマに関する話し合いに対し、一貫して不快感や反対の意思を示した。彼らの多くは、このテーマに関して話すことで彼女たちを性的に積極的にさせるのではないかと懸念したり、このテーマは学校や宗教機関で扱われるべきだと感じたりしていた。話し合いが行われた場合でも、それは通常は曖昧で、説明というよりも警告という形で行われることが多く、彼女たちに自身の身体について教えることより、してはいけないことに焦点が当てられていた。

❗ 反対に女の子は、月経管理や妊娠予防を中心とする、自身の身体に関する知識を深めることを望んでいた。例えば、ベナンのAliceの父親は2024年(彼女が17歳)、「娘は教会の説教から性に関する必要な情報をすべて得ている」と述べたが、Alice本人は同年、「妊娠回避のための適切な方法を学ぶ「女の子クラブ」をコミュニティに設立したい」と語った。

明示的抵抗がもっとも多く確認された抵抗の形であったが、そうした抵抗も女の子が個別インタビュー以外で話せると感じたものとは限らず、また彼女たち全員が、そうしたテーマに関する規範に公然と挑んでいく訳でもなかった。



「彼氏を作ったらあんたを殺す」: 秘密の行動としての抵抗

女の子は成長するにつれ、その多くが密かにジェンダー不平等に抵抗したり、規範に逆らった行動をとったりした。保護者や教師は女の子の抵抗に気づかない場合が多いため、私たちは「秘密の抵抗」を「顕在的行動的抵抗」と区別する。女の子はこの方法で戦略的に若干の自由を勝ち取るかもしれないが、その抵抗が認識されないままならば、顕在的行動的抵抗が生み出す程の、コミュニティでのジェンダー規範への挑戦には至らない可能性がある。

しかし以下に挙げる事例の多くは、時には女の子が大変な勇敢さと創造力を発揮し、期待される役割を拒否することもあるという、興味深い例を提供している。

.....
期待される仕事をしているふりをして密かに反抗していた女の子がいた。
.....

フィリピンのChristinaは2020年(14歳)、インタビュー時に「調理中は他の家事をしなくて済むから」、と料理を楽しむ理由を語り、特にどの家事をやりたくないのかを尋ねると、「弟の世話」と答えた。時に、女の子はやりたくない家事をしなくて済むように、他の家事をしなければならぬと嘘をつくこともあったという。トーゴのAziaは2018年(11歳)、保護者にやりたくないことを指示されたらどうしているか、と尋ねられた際、「病気だと嘘をついて、しません」と答えた。

何名かの保護者は、娘が収入を得ることに懸念や強い嫌悪感を示し、その理由として、学業への悪影響・女の子の家庭内労働への従事の重視・雇用による性暴力に遭う危険への懸念といった点を挙げた。



プランが支援するユース演劇グループのユース俳優たちの、GBVをテーマにした演劇の上演、エルサルバドル
© Plan International

① 63%の女の子が、就労・男の子と友人関係・保護者に知られていない恋愛関係等、秘密裏に抵抗していた。

しかし、女の子の多くはそれでも何らかの形で働き、8名に1名(13%)の女の子が保護者に知られずに収入を得ていた。それはベナンとウガンダで特に顕著で、23名の女の子の内9名が思春期に保護者に知られずに働いて収入を得ていた。

密かに働いていた女の子は、追加的な金銭を得られることや新たなスキルの習得がうれしかったと語った。その密かな反抗は仕事だけに留まらず、彼女たちの多くが社会的制限、特に男の子との交友関係に関する制限にも抵抗していた。少なくとも38%の女の子が、幼少期～思春期に、幼い頃に共に遊んだり、思春期に交流したり、などといった、男の子との秘密の交友関係を持っていた。

調査対象者の多くの保護者は娘が思春期に近づくにつれ、異性との交友関係に懸念を示し始めたが、カンボジアのReasmeyの父親は幼少期からそれを禁じていた。Reasmeyは2011年(5歳)で、父親に「女の子が男の子のように遊ぶのも、男の子が女の子のように遊ぶのもよくない」と告げられた。翌年には母親もそれに同調し、「サッカーは男の子の遊びだから女の子はするべきではなく、男の子は人形で遊ぶべきではありません」と主張した。

② これは過小評価である可能性がある。女の子は秘密の恋愛関係に関して特化した質問はされておらず、彼女たちと保護者の発言を対照させて、このように推測したものである。

だが、2014年にReasmeyは、Uyという男の子をもっとも親しい友人だと語り、規範を密かに破っていた。大多数の保護者は女の子が男の子と過ごすのを禁じる、または異性間の友情を強く非難するため、そうした秘密の友人関係は、密かな形の抵抗と言える。

調査対象者のうち、トーゴ以外の全対象国の女の子24名^aが、調査期間中に秘密の恋愛関係や片思いをしていたことが確認された。秘密の恋愛関係はドミニカ共和国とエルサルバドルで大きなテーマとして扱われたが、インタビュー結果によると、思春期で24名の女の子の内11名に秘密のボーイフレンドがいた。エルサルバドルのRaquelは、ある男の子との恋愛関係を極めて肯定的に語った。彼女は2024年に当時のボーイフレンドとの交際に関しこう述べている:

「実は、私が悲しんでいたときに彼が現れて、本当に色々な面で私を助けてくれました。私は彼に自分のことを何でも話すことができると感じたし[...]そして事実、彼は私に強い自信を与えてくれて、他に沢山のことを感じさせてくれています」

Raquel, 18歳(2024年)、エルサルバドル



ユースのカップルが手をつなぎ、ブラジル
© Plan International / Rafael Gardini



「ガールフレンドがいます」: 顕在的行動的抵抗

調査期間中に、47%の女の子が規範に公然と従わなかったり、コミュニティで女の子が担うべきとされる役割を引き受けることを拒否したりした。そうした抵抗の多くは小規模に留まり、組織的な活動への関与を語った女の子はいなかったが、彼女たちの多くが日々ジェンダー規範に強く抵抗している姿を示した。

女の子の顕在的行動的抵抗には様々な形があり、安全とは言えない状況でもみられた。自身の意向に沿った振る舞いや服装をすること・いじめ/暴力/望まない男性の興味から身を守ること・家事を拒否すること・貯金をして自分のお金を管理すること。

10名の女の子、または彼女たちの保護者が、女の子が男の子のような振る舞いや服装をすることについて言及した。多くの場合、それは保護者が娘に女性的な服を着るよう説得できないことに対する不満を述べた際に言及された。子どもの遊びや服装に関する話で、フィリピンの14名中5名の女の子が、保護者のホモフォビア的で保守的な考え方にも関わらず、男の子のような服装や振る舞いをすると言及されていた。

f フィリピンで「tomboy」は、レズビアンを指すスラングとして使われることが多い。

例えばMahaliaの父親は2011年、男の子が人形で遊ぶなんて馬鹿げている、ということに賛成し、「うちの息子たちにそんなことをさせたらゲイになる」と述べた。2013年には母親が「今までの教師はゲイばかりだった」と説明し、「今までとは違い」Mahaliaの教師陣に満足していると語った。そうした環境下で、Mahaliaは2017年に、女の子はかわいらしく、「色白で髪を伸ばす」べきだと発言した。だが2020年には母親は「Mahaliaはtomboy¹みたいで[...]男の子のように振る舞うから、彼女のことは分からない」と語っている。どう男の子のようなかを尋ねると、母親はMahaliaが「水汲み」や「重いものを運ぶ」といった「男の子がする仕事をする」ことや、ドレスを着ようとしなないことを挙げた。

Mahaliaは2024年(17歳)には、インタビュー時に「今、ガールフレンドがいるの(笑)」と語り、どう感じているかと尋ねられると「幸せ」と繰り返し答え、彼女を「尊敬できる存在」と表現した。同年、Mahaliaの母親は「2人も女性」という点に多少の違和感を示しつつも、「もし彼女のガールフレンドが彼女を幸せにして、彼女が本当にそれで幸せなら、私たちは否定しません」と語った。Mahaliaは、調査期間中に公然と女性と交際していた調査対象者の女の子の2名のうちの1名であり、2名ともフィリピンの女の子だった。



手でハートの形を作る女の子、ウガンダ
© Plan International

① それらの調査結果を踏まえ、女の子が大人からの支援を得ながら安全に規範に抵抗できる環境で育つ必要性を訴える。

そうした関係は女の子にとって前向きで成長につながる経験となり得る。だが、性行為や恋愛関係に関する情報や医療ケアが不足している状況下では、それらは彼女たちの多くに生涯にわたる影響を与えてきた。

例えば、ドミニカ共和国のGriseldaの父親は2020年、娘に秘密のボーイフレンドがいるのではないかと疑っていたが、2021年までにGriseldaは15歳で子どもを産み、22歳のパートナーと同居するようになった。そのため、女の子は行動に対する不公平なジェンダー的制限に抵抗しているかもしれないが、彼女たちの秘密の恋愛関係がずっと年上の男性との性的関係という、ある種の法定強姦であり、多くの危険を孕んでいることへの留意も重要である。

深刻なリスクの1つは、保護者に知られた場合に女の子が陥る状況である。上述の女の子たちは、保護者に男の子との連絡に使った機器を没収・破壊されたが、このような脅迫を伴う手段によって、事態が深刻化する場合は多い。

ベトナムのLyが秘密のボーイフレンドを持っていなかったのは、彼女の母親が2019年に「彼氏を作ったらあんたを殺すと言ったのよ」と述べていることを踏まえると、驚くべきことではないかもしれない。女の子が、行動や性に関する保守的な規範にさらされながら、秘密の恋愛関係を持つことには、強い主体性と抵抗が必要である。

しかし、女の子たちがより大きな自立や自由を求めようとするなかで、その過程で深刻なリスクにさらされていることを認識する必要がある。保護者からの罰として、持ち物を壊されたり、テクノロジーの使用を制限されたり、さらには身体的暴力を受ける場合もある。また、早期の結婚やパートナー関係に伴い、望まない妊娠を含む健康上のリスクにも直面している。

コミュニティでユースリーダーを務める女の子、フィリピン
© Plan International





サッカーの練習をする女の子たち、ベナン
© Plan International

彼女は、異性に結びつけられた服装や遊びを強く否定する家庭で育った。しかし、子ども時代から思春期にかけて次第に、それに従う必要があるのか疑問を抱くようになった。そして最終的には、自身の性自認と別の女の子との関係の中で、幸福を見いだすに至った。

多くの状況下で、女の子は「男の子のように振る舞ってきた」とあえて明言しないまでも、典型的な男の子のスポーツとされるものを続けていた。上述のブラジル・ベトナム・フィリピンの女の子に加え、ベナン・ウガンダ・トーゴ・カンボジア・エルサルバドルの女の子の多くも、男の子のスポーツとみなされることが多いサッカーを続けていた。

例えば、トーゴの何名かの女の子は、女の子がサッカーをすることは禁じられている、と述べたが、彼女たちの多くが子ども時代にサッカーをしていた。その中の1名であるFezireは2019年(13歳)、弟たちとサッカーをしていたと話し、サッカーができる安全な場所を求める架空の女の子の物語に対して2021年(15歳)に、「いい話ですね。女の子がサッカーをしたいと思うのはいいことです」と述べた。

男の子からのいじめやハラスメントに対し、身体的手段を用いて身を守るという積極的な抵抗をしていた事実がある女の子も何名かいた。

その身体的抵抗の形は比較的珍しいが、自身をからかいや攻撃の対象とする力関係に対し、積極的な反発を行っている女の子が存在する実態を示している。その傾向はベトナムとフィリピンの女の子に特に顕著にみられた。ベトナムでは調査対象者の9名の女の子のうち6名が、男の子を殴ったことがあると述べた。その2カ国が、自身の性表現に疑問を抱き、男の子のような服装・振る舞いをする女の子がもっとも多い国々であったことは、驚くべきことではないかもしれない。対象国中、保護者が時に保守的でホモフォビア的な意見を持っていても、現地の女の子は期待されているものとは異なる行動が取れると、もっとも強く感じられた。

ドミニカ共和国でも身体的手段を用いた抵抗に関する発言が確認された。2016年、Leylaの叔母はインタビュー時に、「Leylaは彼女に触った男の子全員を殴ります」と語り、同年にKaterinの母親は、「Katerinに誰かが触ったら、彼女はその人物の片目を潰すでしょう!」と述べている。

それらの事例は、自分が望まない行為に対し身体的な手段を用いて抵抗する姿を示しているが、家庭内でもより控えめな形でジェンダー的な期待に抗う女の子もみられた。



女の子の15%が、人生の中で家事分担に対して疑問を抱いたり、明確な拒否をしたりしたことがあるという。ウガンダの何名かの女の子は、命じられた作業が不公平だと感じた場合は特に、保護者の指示に常に従う必要はない、という考えを支持した。

何名かの保護者は娘が成長するにつれ、家事を怠けるようになったと指摘したが、もっとも明確な抵抗を示したのはAmeliaであり、2023年(17歳)に有償の仕事の経験の有無を尋ねた際にこう答えている:

「いえ。でも、私が忙しいのに兄弟たちがいつも洗濯を頼んでくるので、彼らの内の誰かが私を動かせようとしたら、私のサービスに対価を払わせます[笑]」。

家庭外で、女性の経済活動への参加に対する制限に抵抗し、収入を得るだけでなく貯金の実現方法も見出した女の子もいた。だが彼女たちの多くのコミュニティでは、女性の経済活動への関与を強硬に禁じていたため、それを実行できた女の子は多くはない。トーゴのLadiは2021年、彼女と友人たちで貯蓄グループを立ち上げたことについて語ったが、興味深いことにその友達というのは全員男性だった:

「私には男の子の学校の友人がいて、一緒に遊び・学び・貯蓄グループも一緒に立ち上げました」

👤 Ladi, 15歳(2021年)、トーゴ

同様に、ベナンのAliceは2021年のインタビュー時に、自身と友人たちが協力して貯蓄組合を設立したと語った:

「私は(自身の収入から拠出した)お金を管理してもらおう母に預け、一部は朝食の米代に充て、残りは学校の貯蓄クラブに払っています。毎日50フラン貯めており、友人と一緒にやっています[...]貯蓄クラブを作った時に、お金を集める係は順番にしようと決めました」

👤 Alice, 14歳(2021年)、ベナン

興味深いことに、2023年時点ではAliceの父親は彼女が収入を得ていることに気づいていなかった。だが2021年のその発言によれば、Aliceは少なくとも2年前から収入を得ており、その一部を貯蓄していたことがわかる。そしてそのことは、彼女の収入の恩恵を受けていた母親も承知していた。

既存のコミュニティや学校の貯蓄グループへの参加は、大きな抵抗行動には見えないかもしれないが、女の子の多くには実行が不可能である中、自分でお金を管理し、使い方も自分で決めているため、私たちはそれをジェンダー規範に対する顕在的な抵抗の形とみなしている。時には、銀行や現地のNGOが女の子のための貯蓄組合を用意することもある。ベトナムのUyenは祖母が亡くなってから深刻な窮乏状態にあったが、いとこが支援してくれた上に、銀行口座を開設することが出来たため、なんとかその状況から抜け出すことが出来た。彼女は少額ながらも教育費のために貯金をすることができた。全体として、調査対象者の女の子のほぼ半数(47%)が何らかの形で公然とジェンダー規範に背いていた。

女の子のための公式の集団や組織に参加する機会を持つ女の子はほとんどいなかったが、参加を望む者もみられた。例えば、Rosamieは政治的議論をする女の子向けの組織を望み、AliceはSRHRについて議論するクラブを望み、Sheilaは収入があれば貯蓄組合に参加したいと望んでいた。貯蓄組合に参加できた者によると、それは重要な支援になるとのことだ。

しかし、それらの女の子は高度な主体性を示したが、重大な変化の実現のために必要なリソースや支援的環境が整っていない場合が多い。

「女の子も男の子と同様、 ボールで遊べる」: Juliana、ブラジル

女の子が実行している様々な抵抗の形をこれまで検討したが、本セクションでは、保護者の考えを変えて、大好きなスポーツを続けることを可能にした、ある女の子の事例を深く考察する。これによって、彼女がその抵抗のために、どのようなリソースと支援を必要としたのかを知ることができる。

多くの国で、かつて女性がサッカーをすることはジェンダー規範に反する行為とみなされていた。一部の国では未だにその考え方が続いている⁴⁹。サッカーは女性的ではなく、女性の健康に有害で、子どもを持つ能力に影響を及ぼすとして、イングランド(イギリス)やフランスなどの国々に追随し、ブラジルでは1941年、女性がサッカーをすることが禁じられ、それが1979年まで続いた⁵⁰。

今日、ブラジル女子サッカー代表チームは世界最強チームの1つとして認知されるようになった⁹。だが、ブラジルの女子サッカー選手は、趣味もしくは競技などのレベルを問わず、依然としてジェンダーによる不平等・偏見を経験している⁵¹。

Julianaは、ブラジル北東部マラニョン州の都市部で、幼少期から母方の祖父母に育てられた。成長するにつれ、Julianaは伝統的な価値観を持つ祖父母のジェンダー規範や信念にしばしば抵抗するようになった。女の子の行動に関して彼らの意見は頻繁に衝突したが、その主なテーマは女の子が、特にJulianaがサッカーをすることであった。

Julianaが4歳の時、祖父はこう説明した:

「[女の子がサッカーをするのは]普通ではありません。女の子は、彼女たちにふさわしいスポーツをすべきです」

Julianaの祖父、2011年、ブラジル

幼い頃から、Julianaのサッカーへの情熱は、ジェンダー役割分業に対する疑問という形となっていた。

Julianaの祖母は、Julianaは男の子と遊ぶべきではないと決めていた。だがJulianaは兄弟や近所の男の子とサッカーをするのが好きで、女の子も男の子と同様にボール遊びが好きだと思っていた。

「彼女[Julianaの祖母]は、男の子と一緒にいるべきじゃないと言います。また、男の子がサッカーへの誘いに来ても、行くべきではないと思っています」

Juliana、11歳(2018年)、ブラジル

祖母が反対しても、Julianaは男の子と遊び続け、サッカーも続けた。私たちは2019年、Julianaに、男の子とサッカーをすることを望んだ女の子が、そのことで保護者から時に身体的な罰を受けるという架空の物語に対する意見を求めた。

Julianaはその架空の物語の中の保護者を「少し性差別主義者です」とし、女の子は彼らに逆らいサッカーを続ける夢を追求すべきだと述べた。また彼女自身も、サッカーへの情熱に対して友人から批判されたが、毅然と反論したことを語った。

「[学校の友人が]男の子みたいって馬鹿にするのです。いつも男の子とボール遊びしてるって...女の子も男の子と同様にボール遊びできるから、それは性差別だって言ってやります」

Juliana、12歳(2019年)、ブラジル

男の子もJulianaがサッカーをするのを「男の子の遊びだから」と止めようとした(2021年)が、後に彼女を試合に参加させるようになった。17歳の時、Julianaは辛い状況にあったが、そんな彼女にとってサッカーに夢中になることが唯一の楽しみだった。祖母はサッカーがJulianaの心の支えであることに気づき、彼女がサッカーをする時間を確保できるよう支援するようになり、「それを彼女から奪ったりしない」と語った。そうして祖母は以前から態度を180度転換し、ジェンダー規範に逆らう女の子が保護者の考え方に影響を与え得ることを示した。

Julianaの物語

Julianaの物語からは驚くべき勇敢さが伝わってくる。成長するにつれて主体性が高まり、不公平なジェンダー規範を疑問視していく様子がわかる。祖父母の考えをガラリと変え、サッカーを継続できることを実現させたのには、いくつかの理由が考えられる。

① **ブラジルでの規範と考えの変化:** 同国での輝かしい成功を収めている女子サッカーチームに関心を寄せる人びとが増えていく。Julianaが生まれる前に法律は撤廃されたが、社会的規範がそれに追いつくには時間を要し、Julianaの祖父母の当初の意見からもそれが伺える。

② **Julianaは彼女がサッカーをできる施設を利用できたこと:** 友人や祖父母からその行動に対して批判を受けていたが、彼女がサッカーをできる場所が存在し、その利用を完全に禁止されてはいなかった。

③ **Julianaの祖父母が、彼女の健康と幸福にとってのスポーツの重要性を認識し、自身の考え方を改めたこと:** もっとも重要な理由として、Julianaの祖母はジェンダー規範より孫娘の幸福を優先した。

⁹ ブラジル女子サッカー代表チームは過去10年間で、FIFAランキングトップ10入りを9回果たしている。
<https://inside.fifa.com/fifa-worldranking/BRA?gender=women>

女の子の日々の抵抗への支援

このように、女の子がジェンダー規範に抵抗する形に関する物語は、彼女たちの日々の抵抗に対して、私たちがもっとも効果的に支援するために、何を伝えているのだろうか。



女の子が負うリスクの理解

彼女たちの物語全体にわたって、彼女たちの多くが主体性を持って様々な抵抗をしていることは明らかだが、同時に、その過程で重大な危険に晒されている者もいることも明らかである。

性教育やSRHを受ける機会が十分に得られない中で、秘密の恋愛関係を持ち、望まない早期妊娠に至った女の子の事例がみられた。恋愛関係が発覚した場合に受けられる可能性がある、または実際に受けた懲罰について語った女の子もいた。保護者から暴力を受けたり、所有物を破壊されたり、家から追い出されたりするなどである。また、女の子が家事を怠ったり、期待される行動をとらなかつたりした場合に、彼女たちが受ける暴力的な懲罰についても語られた。

女の子の安全を犠牲にして「女の子の力」を主張することがないようにすることは、極めて重要である。国際開発機関が、女の子が被り得る潜在的な危害を認識せず、彼女たちの抵抗を過度に称賛すれば、彼女たちを危険な行動に駆り立ててしまう恐れがある。また世界的に、ジェンダー平等や女の子と女性の権利に対する敵意が高まっており、彼女たちが公式に参加できる場が縮小している状況も目につくようになってきた。

世界中の女の子の多くにとって、目立った活動に参加したり、あからさまに規範に逆らったりすることは危険を伴い得る。

自身の人生の専門家

私たちは、時間的余裕を奪い、自由を制限し、自身が安全に学び・遊びを楽しむことさえ不可能にするジェンダー規範や考えに、女の子が日々向き合っていることを学んだ。私たちは彼女たちの声を傾聴し、彼女たちに危険のない方法で、彼女たちが期待されている行動を一層深く問い直し、拒否することを支援する。彼女たちは自身の人生の専門家であり、彼女たち自身がどんな行動が安全で、どんな行動が危険であるかを定義できることを、私たちは評価している。

プラン・インターナショナルは、女の子が不平等を特定し、より大きな自由を獲得するための力を備えることを提唱している。私たちは、女の子が安全に実行できることを拡大し、あらゆるレベルで変化を推進するために、家族・コミュニティ・法的枠組み・教育など、彼女たちを取り巻く環境を整える責任を負っている。

支援を提供する大人

女の子は変化を求めているが、その実現に向けて数多くの障壁が立ちはだかる。彼女たちは、抵抗で成果をあげることに責任が自身にだけにあるのではなく、大人の支援やリソースの利用可能性、安全な環境次第であることを認識し始めている。私たちは、保護者やコミュニティの大人が課す厳格なジェンダー規範が、彼女たちの主体性を制限していることを確認した。

大多数の保護者は依然として、特定の役割が男性/女性に「元々」割り当てられているとする、本質主義的見解を持っている。それは、女性は家事を担い、男性は稼ぎ手や意思決定者とすることが多い。保護者の多くは、そうした考えが娘の平等な機会への支援と矛盾し、その機会を妨げていることに気づいていない。

Karenの物語

エルサルバドルのKarenは思春期の間、ずっとサッカーをしていた。彼女は2019年(12歳)のインタビュー時に、「友人に「サッカーをするから男の子だ」と言われても続けています」と語った。彼女は2024年(17歳)になっても毎週サッカーを続けていた。「ええ、好きですよ。父がサッカー好きだから、それを受け継いだんです」。Karenは明らかに父親の応援・支援を受けており、それがサッカーを楽しむことを継続できる鍵となっていた。

肯定的な子育てを実践し、女の子の声を傾聴し、応援することは、支援的な大人の責任である。

リソースや安全な場所へのアクセス

女の子は、困窮した環境や、良質で利用可能な教育・医療および経済的支援などのインフラが欠如した困難な環境下で、ジェンダー規範に抵抗している。

彼女たちの話から、リソースと安全な空間の利用可能性が、女の子が抵抗するための主体性を支える重要な要素であることがわかる。例えばベナンのAliceは2023年(16歳)、父親に内緒で有償の仕事をしていた。「道路の砂を集めて売っていました。乾季には1鉢150CFAフラン、雨季には100CFAフランで売っていま

した。その砂は建設に使われます」。その仕事をするのを誰が決めたのか尋ねると、「お金を稼ぐために自分で決めました」と答え、「そのお金で服や靴を買います」と語った。この話は、Aliceが自由に仕事の交渉ができ、収入を管理する教育背景を有していること、そして彼女自身の不屈の精神力を証明している。また、集団・グループ・クラブの支援が抵抗するための強いサポートであると話す女の子もみられた。

本調査で特定された支援の形には以下が含まれる。

- ➡ 女の子のためのグループ・クラブ・貯蓄組合
- ➡ ジェンダー不平等と女の子の権利に関するコミュニティレベルでの啓発活動
- ➡ 男の子と女の子の両方に対する肯定的な子育ての促進
- ➡ 女の子のコミュニティへの平等な参加を支援する強力な法的枠組みと、身体的懲罰および転向療法の実施の禁止法
- ➡ 主要インフラへのアクセス改善や、作業時間短縮に寄与する機器の提供など、家庭での無償ケア労働負担の軽減への取り組み
- ➡ 女の子が運動や遊びを楽しめる、安全なコミュニティ施設

それらは実質的に、女の子が望む変化について話し合える場の構築と、それらの議論を信頼できる大人が意思決定者に伝え、対応が実行される仕組みを保障するという責任を、大人に課すことを意味する。

結論: 女の子は日々変革を促進している

女の子は創造的で勇敢な形で疑問を抱き、抵抗し、変化を求めている。そして世界中の女の子から現状を変えたいという明確な強い望みが示されている。

女の子の大多数は平等主義を支持しており、特に教育の享受・キャリア構築(そのキャリア選択がジェンダー的である場合が多いが)・平等な自由と移動・女性の経済的エンパワーメントを望んでいる。

- ➔ 少なくとも80%の女の子が、女の子と男の子は平等に自由であるべきだと信じている
- ➔ 99%の女の子が、女の子と男の子が教育を享受する機会は平等であるべきと考えている

女の子はジェンダー規範を疑問視し、ジェンダー不平等が社会的要素や期待の結果であると認識している。女の子の移動や交友関係に対する制限、または男の子より多くの家事を課される不公平さに怒りを覚え、それらを不正義だと表現する女の子もいた。

だが、女の子はそうした意見を実行に移したり公に共有したりすることへの限界を感じている。

特筆すべき点は、女の子の多くが秘密裏、またはあからさまな形でジェンダー規範に抵抗していることである。女の子のほぼ半数が公然と抵抗している一方、63%の女の子は保護者に気づかれずに抵抗しており、彼女たちが自身の範疇を超えた変化を促す形で抵抗するには、一層の支援が必要であることを示している。

- ➔ 調査対象者の女の子のうち8名に1名が、保護者に知られずに収入を得ている。
- ➔ 少なくとも38%の女の子が、幼少期～思春期に、男の子との密かに友人関係を持っている。
- ➔ 24名の女の子が、保護者に秘密で恋愛関係を持っていた。

女の子は、制限的な家庭やコミュニティでの自由と自立を行使する方法の模索を続けており、その自由の獲得のために自身を危険に晒す可能性さえある。しかし表に出ない形の抵抗ばかりでは、前進は停滞する。隠れたままでジェンダー平等の達成は実現できない。

世界中の女の子の中には、より明確な形で彼女たちが晒される規範に抵抗することができる者もいる。

ほぼ半数の女の子が、ジェンダー規範への何らかの顕在的抵抗に関わっており、それには以下が含まれる。

- ➔ 期待されているものとは異なる振る舞い・服装をする
- ➔ いじめや暴力から自身を守る
- ➔ 家事を拒否する
- ➔ 貯蓄により自分のお金を管理する

- ① 私たちは、女の子が心地よく感じられるあらゆるレベルでの抵抗を、彼女たちが安全に行えることを保障し、支援したいと考えている。
- ① 私たちは、保護者の役割・安全な環境・リソースの利用可能性が、女の子が自身のために主張し続け、女の子のための変化を求めることを支える鍵となることを認識している。
- ① そして女の子は、自身の主体性の安全な行使と、世界中の女の子が晒されている日々のジェンダー不平等への挑戦のために、大人・コミュニティ・組織・政府からのさらなる支援を必要としている。

提言



政府と当局



法的にジェンダー平等を明記する**立法および政策枠組みの確立・強化・施行**すること。身体的懲罰および転向療法を禁止すること。女の子の権利の行使を妨げる差別的な法的規範を撤廃すること。皆が表現の自由と結社・集会の権利を有する、開かれた安全な市民空間を提供すること。

高等教育・キャリアパス・金融リテラシーなどの機会均等の強化プログラムを含む、**ジェンダーの障壁を排除し包摂を促進する教育への資金提供と実施**を行うこと。

女の子のエンパワーメント・リーダーシップ・権利に対する意識向上を支援する、**安全でコミュニティベースのプログラムや取り組みに投資し、それを構築**すること。女の子が自身に関わる問題を自由に議論できるフォーラムを資金面で支援し、そこで意見を現地の意思決定に反映させる仕組みを設けること。

投資と提携によって平等を支援し、必要なインフラの整備と雇用主への奨励金の提供によって無償のケア労働の負担を軽減させること。また、ジェンダー平等の啓発を促進するための支援・リソース提供・市民社会/NGO/地方自治体/コミュニティリーダーとの連携をすること。



NGOと市民社会



ジェンダー規範を強化する行動や考えに抵抗するため、保護者・男性・男の子・コミュニティリーダーを対象に、**意識向上と肯定的な子育てに関するワークショップを提供**すること。そこで身体的懲罰や男性の暴力を「当たり前のこと」とする規範の変革を図り、女の子と男の子のそれぞれに対し、好ましいロールモデルを紹介し、好事例を称賛すること。

女の子の**教育・技能開発の機会を改善**し、現状のジェンダー役割分業は、彼女たちが本来享受すべき機会の利用を妨げていること・金融リテラシー・労働者の権利と職場でのセクシュアルハラスメント・妊娠や性感染症の可能性低下に関するSRHR教育・雇用と職業的スキルなどに関する研修を提供すること。

女の子が安全にジェンダー不平等や変化の実現のために必要なことを議論できる、貯蓄組合・協議・評議会など、**女の子が安全に参加できる包摂的なクラブ・グループ・ネットワークを確立・強化**すること。彼女たちが自身の組織を形成するのを支援すること。女の子が抵抗の経験を共有して互いに連携することができ、集団行動に関する教育を受けられる非公式(オンライン)グループを設けること。

女の子の意見を地域/地方/国家の意思決定者に届けるフォーラムを開催する・対等なパートナーとして女の子のグループへ資金提供する・女の子がキャンペーンや啓発資料において実施しているジェンダー不平等に対する様々な抵抗に賛同する。これらを通して、**女の子の声を広く周知させ、多様な形の抵抗を支持**すること。



地方自治体と コミュニティリーダー



女の子のスポーツや貯蓄グループなど、**女の子の主導するコミュニティの取り組みを支援・促進**し、女の子主導の行動やそれらに関する懸念事項は、現地レベルで細かく可視化されること。

協議・諮問委員会・公聴会・ユース代表などを通して、女の子が地域の意思決定の場へ参加できるよう、**有意義な協議や参加制度を確立**すること。女の子が懸念事項について集団で話し合える安全な場を設け、そうした意見を意思決定に反映させる仕組みを構築すること。

包摂的なインフラと支援によりジェンダー不平等を縮小し、社会支援の利用可能性を向上させるとともに、無償のケア労働の負担を軽減し、すべての組織活動にジェンダー的視点が統合されるようにすること。

女の子に、安全な施設・オンライン上での安全に関する情報・ジェンダーに配慮したサービス・GBVに対する強力な措置を提供し、**安全とサービスの利用可能性を保証**すること。



学校と教育者



女の子が自身にとって重要なテーマの話し合いや、好ましいロールモデルやリーダーシップに関する議論、望む未来を想像し言語化できる、**女の子のための安全なクラブやスペースを設ける**こと。

包摂的活動と教育を通じて、ジェンダー平等を推進すること。スポーツ・遊び・おもちゃなどの活動において、安全とジェンダーの尊重を保証すること。女の子の学業への負担を軽減すること。GBVへの挑戦と女の子のエンパワーメントの擁護者として、男の子の関与を促すこと。カリキュラムにフェミニスト的リーダーシップ・活動・ソフトスキルを組み込み、CSEを提供すること。

学校でのリーダーとしての立場への女の子の進出を支援し、疎外されて支援が届きにくい女の子の教育および技能習得の拡大を行い、**女の子全員の参加とアクセスを実現**すること。

教師と運営組織がジェンダー的エンパワーメントを主導し、学校コミュニティ全体でジェンダー平等を実現するための特別措置を実施できる体制にするため、**運営方針・教職員研修・カリキュラム全体に年齢とジェンダーへの配慮を組み込む**こと。



女の子がコミュニティのユースクラブの活動を主導する、カンボジア
© Plan International

謝辞

何よりもまず:

本調査プロジェクト「現実の選択、現実の生活」にご協力いただいた女の子・ご家族・コミュニティ住民の方全員に、心より感謝申し上げます。長年にわたり皆様からいただいた貴重な知見とご協力なしでは、本調査は実現し得なかった。

本報告書の編集者:

Keya Khandaker博士とHannah Colpitts-Elliott。基となった報告書は、Rosie Walters博士、Keya Khandaker博士、Kit Catterson博士、Hannah Colpitts-Elliott、Belén Garcia Gavilanesにより執筆された。

プラン・インターナショナル国別事務所:

ベナン・ブラジル・カンボジア・ドミニカ共和国・エルサルバドル・フィリピン・トーゴ・ウガンダ・ベトナムが、全データ収集の監督を行った。

長年にわたり:

データ収集に多くの方々に関わってきたが、特に最近の調査での各国担当者の方々に深く感謝申し上げます。ベナンのRoland Djagaly、ブラジルのAna Lima、カンボジアのVannara Ouk、ドミニカ共和国のOlga Figueroo、エルサルバドルのJulia Brenda LopezとCelina Rosales、フィリピンのRomualdo Codera Jr.とManny Madamba、トーゴのJoseph Badabadi、ウガンダのDavid Aziku、ベトナムのTrung Truong Vu。

編集・諮問委員会の皆様に心より感謝申し上げます:

Anya Gass、Mishka Martin、Zoe Birchall、Anna MacSwan、Melina Froidure、Jacqueline Gallinetti。

加えて感謝を申し上げます:

プラン・インターナショナル・グローバル・ハブのAdèle PavéとCardiff大学のMorgane DirionとHazel Y Choiに、データ分析への貢献に対して感謝する。

資金提供:



本調査は2021年以降、カナダ・デンマーク・フィンランド・フランス・ドイツ・アイルランド・スウェーデン・スイス・イギリスのプラン・インターナショナルの国内組織から多大な資金提供を受け、プラン・インターナショナル・グローバル・ハブが管理している。2021年までは、プラン・インターナショナル・イギリスが本調査の管理・資金提供を行っていた。



本調査プロジェクトおよび報告書作成は、Cardiff大学とLearned Society of Walesからの資金提供に加え、Economic and Social Research CouncilとArts and Humanities Research Councilからのインパクトファンドにより支援された。

脚注

- 1 Khoja-Moolji, Shenila (2016) "Doing the 'Work of Hearing': Girls' voices in transnational educational development campaigns," *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, 46:5, 745-763.
- 2 Khoja-Moolji, Shenila (2015) "Reading Malala: (De)(Re) Territorialisation of Muslim Collectivities," *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East*, 35:3, 539-556.
- 3 Loveday, Lilli, Jenny Rivett and Rosie Walters (2023) "Understanding Girls' Everyday Acts of Resistance: Evidence from a longitudinal study in nine countries," *International Feminist Journal of Politics*, 25:2, 244-265.
- 4 Walters, Rosie (2023) "Reading Focus Group Data against the Grain," *International Journal of Qualitative Methods*, 22, <https://doi.org/10.1177/16094069221146>.
- 5 Lee-Koo, Katrina (2020) "Decolonising Childhood in International Relations," in J. Marshall Beier (ed.) *Discovering Childhood in International Relations*, New York: Palgrave Macmillan, 21-40.
- 6 Berents, Helen (2019) "Apprehending the 'Telegenic Dead': Considering images of dead children in global politics," *International Political Sociology*, 13, 145-160, p.148.
- 7 Martuscelli, Patricia Nabuco, and Rafael Duarte Villa. 2018. "Child Soldiers as Peace-Builders in Colombian Peace Talks Between the Government and the FARC-EP." *Conflict, Security & Development* 18 (5): 387-408.
- 8 Berents, Helen and Caitlin Mollica (2022) "Reciprocal Institutional Visibility: Youth, peace and security and 'inclusive' agendas at the United Nations," *Cooperation and Conflict*, 57:1, 65-83. p.69.
- 9 Khoja-Moolji, Shenila (2018) *Forging the Ideal Girl: The Production of Desirable Subjects in Muslim South Asia*, Oakland: University of California Press. p.3.
- 10 Bent, E. (2016) 'Making It Up: Intergenerational activism and the ethics of empowering girls', *Girlhood Studies*, 9:3. 105-121. p.107.
- 11 Taft, Jessica K. (2020) "Hopeful, Harmless and Heroic: Figuring the girl activist as global saviour," *Girlhood Studies*, 13:2, 1-17. p.3.
- 12 Locke, Jill (2023) "Beyond Heroes and Hostility: Greta Thunberg, Vanessa Nakate, and the Transnational Politics of Girl Power," *Nora – Nordic Journal of Feminist and Gender Research*, 31:2, 117-127, pp.120-1.
- 13 Olesen, Thomas (2016) "Malala and the Politics of Global Iconicity," *The British Journal of Sociology*, 67:2, 307-327.
- 14 Thomas, Elsa Ashish and Rashid Narain Shukul (2015) "Framing of Malala Yousafzai: A comparative analysis of news coverage in Western and Pakistani mainstream English print and alternative media," *Media Asia*, 42:3-4, 225-241.
- 15 Walters, Rosie (2016) "'Shot Pakistani Girl': The limitations of girls education discourses in UK newspaper coverage of Malala Yousafzai," *British Journal of Politics and International Relations*, 18:3, 650-670.
- 16 Khoja-Moolji, Shenila (2017) "The Making of Humans and their Others in and through Transnational Human Rights Advocacy: Exploring the cases of Mukhtar Mai and Malala Yousafzai," *Signs*, 42:2, 377-402.
- 17 Wilson, Kalpana (2010) "Picturing Gender and Poverty: From 'victimhood' to 'agency'?" in Sylvia Chant (ed.) *The International Handbook of Gender and Poverty*, Cheltenham: Edward Elgar, 301-306. p.306.
- 18 Shain, F. (2013) "The Girl Effect": Exploring narratives of gendered impacts and opportunities in neoliberal development', *Sociological Research Online*, 18:2. 31
- 19 Koffman, Ofra and Gill, Rosalind (2013) "'The Revolution Will Be Led by a 12-Year-Old Girl': Girl power and global biopolitics," *Feminist Review*, 105, 83-102, p.86.
- 20 Grosser, Kate and Nikki van der Gaag (2013) "Can Girls Save the World?" in Wallace, Tina, Fenella Porter and Mark Ralph-Bowman (eds) *Aid, NGOs and the Realities of Women's Lives: A Perfect Storm*, Rugby: Practical Action Publishing, 73-87. p.78.
- 21 Keya Khandaker and Lata Narayanaswamy (2020) "The Unbearable Whiteness of International Development," Ghent Centre for Global Studies, 以下にて入手可能: <https://www.ghentcentreforglobalstudies.be/the-unbearable-whiteness-of-international-development/2/> [最終アクセス日 2025年10月8日].
- 22 Chant, Sylvia (2016) "Galvanising Girls for Development? Critiquing the shift from 'smart' to 'smarter economics'," *Progress in Development Studies*, 16:4, 314-328. p.315-6.
- 23 Kabeer, Naila (1999) "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the measurement of women's empowerment," *Development and Change*, 30, 435-464. p.435.
- 24 Chant, S. and Sweetman, C. (2012) 'Fixing Women or Fixing the World? 'Smart economics', efficiency approaches, and gender equality in development', *Gender and Development*, 20:3, 517-529. p.521.
- 25 Chant, Sylvia (2016) "Women, Girls and World Poverty: Empowerment, equality or essentialism?" *International Development Planning Review*, 38:1, 1-24. p.5.
- 26 Bent, E. (2013), "A Different Girl Effect: Producing Political Girlhoods in the 'Invest in Girls' Climate", in Nenga, S. K. & Taft, J. K. (eds), *Youth Engagement: The Civil-Political Lives of Children and Youth*, Emerald Group: Bingley, pp. 3 – 2.
- 27 Calkin, S. (2015) 'Post-Feminist Spectatorship and the Girl Effect: 'Go ahead, really imagine her'', *Third World Quarterly*, 36: 4, 654-669. p.665.
- 28 Hicckel, J. (2014) 'The 'girl effect': Liberalism, empowerment and the contradictions of development', *Third World Quarterly*, 35: 8, 1355-1373. p.1364.
- 29 Bent, Emily (2013) "The Boundaries of Girls' Political Participation: A critical exploration of girls' experiences as delegates to the United Nations Commission on the Status of Women (CSW)," *Global Studies of Childhood*, 3:2, 173-182.
- 30 Clay, Kevin L. and David C. Turner III (2021) "'Maybe You Should Try It This Way Instead': Youth activism amid managerialist subterfuge," *American Educational Research Journal*, 58:2, 386-419. p.388.
- 31 Walters, Rosie (2018) "Reading Girls' Participation in Girl Up as Feminist: Club members' activism in the UK, USA and Malawi," *Gender and Development*, 26:3, 477-493.
- 32 Walters, Rosie (2025) *Girls, Power and International Development: Agency and Activism in the Global North and South*, Bristol University Press.
- 33 Walters (2025), chapter 8.
- 34 Taft, Jessica K. (2014) "The Political Lives of Girls," *Sociology Compass*, 8:3, 259-267. p.263.
- 35 Loveday, Lilli, Jenny Rivett and Rosie Walters (2023) "Understanding Girls' Everyday Acts of Resistance: Evidence from a longitudinal study in nine countries," *International Feminist Journal of Politics*, 25:3, 244-265.
- 36 Plan International UK (2019) "Girls Challenging the Gender Rules: Benin, Togo and Uganda", 以下にて入手可能: <https://plan-international.org/uploads/2022/08/Girls-Challenging-the-Gender-Rules-SSA-Full-Report.pdf> [最終アクセス日 2025年10月8日].
- 37 de Finney, Sandra. 2014. "Under the Shadow of Empire: Indigenous Girls' Presencing as Decolonizing Force." *Girlhood Studies: An Interdisciplinary Journal* 7 (1): 8-26. p.11.
- 38 Lake, Robert and Tricia Kress (2017) "Mamma Don't Put That Blue Guitar in a Museum: Greene and Freire's duet of radical hope in hopeless times," *Review of Education, Pedagogy and Cultural Studies*, 39:1, 60-75. p.64.
- 39 Duncan-Andrade, Jeffrey M. (2009) "Note to Educators: Hope required when growing roses in concrete," *Harvard Educational Review*, 79:2, 181-194.
- 40 Vanner, Catherine (2019) "Toward a Definition of Transnational Girlhood," *Girlhood Studies*, 12:2, 115-132. p.126.
- 41 Madhok, Sumi and Shirin M. Rai (2012) "Agency, Injury, and Transgressive Politics in Neoliberal Times," *Signs*, 37:3, 645-669. p.646.
- 42 Caron, Cynthia M. and Shelby A. Margolin (2015) "Rescuing Girls, Investing in Girls: A critique of development fantasies," *Journal of International Development*, 27, 881-897. p.895.
- 43 Kabeer, Naila (1999) "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the measurement of women's empowerment," *Development and Change*, 30, 435-464. p.438.
- 44 Parpart, Jane (2020) "Rethinking Silence, Gender and Power in Insecure Sites: Implications for feminist security studies in a postcolonial world," *Review of International Studies*, 46:3, 315-324. p.317.
- 45 Parpart, Jane (2010) "Choosing Silence: Rethinking voice, agency and women's empowerment," in Roisin Ryan-Flood and Rosalind Gill (eds) *Secrecy and Silence in the Research Process: Feminist Reflections*, Routledge, 15-29. p.19-20.
- 46 Switzer, Heather (2018) *When the Light is Fire: Maasai Schoolgirls in Contemporary Kenya*, University of Illinois Press.
- 47 Rossatto, Csar Augusto (2004) *Engaging Paolo Freire's Pedagogy of Possibility*, Rowman and Littlefield. p.12.
- 48 Plan International (forthcoming) 'Girls Everyday Politics in Uganda
- 49 Rial, Carmen (2024) Women's football in mid-twentieth century Brazil and France: three team managers from prohibition to profit, *Soccer and Society*, 26(14). 以下にて入手可能: https://www.researchgate.net/publication/387468435_Women%27s_football_in_mid-twentieth_century_Brazil_and_France_three_team_managers_from_prohibition_to_profit [最終アクセス日 2025年10月8日].
- 50 Ibid.
- 51 Knijnik, J. (2015) Femininities and masculinities in Brazilian women's football: Resistance and compliance, *Journal of International Women's Studies*, 16(3). 以下にて入手可能: https://www.researchgate.net/publication/282795581_Femininities_and_masculinities_in_Brazilian_women's_football_Resistance_and_compliance [最終アクセス日 2025年10月8日].



Until we are all equal

プラン・インターナショナルについて

プラン・インターナショナルは、子どもの権利を推進し、誰もが平等な世界の実現を目指し85年以上にわたり世界80カ国以上で活動する国際NGOです。一人ひとりの子どもが本来持つ力を引き出すことで地域社会に前向きな変化をもたらされることを信じて、子どもや若者、さまざまなステークホルダーとともに活動しています。特に、貧困や暴力、差別や排除によって弱い立場に置かれている女の子の支援に力を入れています。

子どもや女の子たちが直面している不平等を生む原因を明らかにし、その解決にむけ取り組むことで、子どもたちが生まれてから大人になるまで寄り添い、自らの力で困難や逆境を乗り越えることができるよう支援します。

誰もが平等な世界の実現にむけて、歩みを止めずに進んでいきます。



Cardiff大学について

Cardiff大学はイギリスを代表する教育・調査大学の1つです。同大学の法学・政治学部は、教育を通じて知識を創造・活用し、今日と将来の世代のために人びとの生活を改善することを目指しています。

2025年発行。本文 © プラン・インターナショナルとCardiff大学

プラン・インターナショナルは、本報告書に含まれる写真の公開に対し、許可と必要な同意を得ている。

Plan International

Global Hub

Dukes Court, Duke Street, Woking,
Surrey GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155

Fax: +44 (0) 1483 756505

E-mail: info@plan-international.org



plan-international.org



facebook.com/planinternational



twitter.com/planglobal



instagram.com/planinternational



linkedin.com/company/plan-international



youtube.com/user/planinternationaltv